地球ことば村・言語学ゼミナール

― 言語の多様性と普遍 ―

報告集

座長　金子 亨 先生

NPO 法人地球ことば村・世界言語博物館

目次

はじめに 2

(1) 言語記述の基本的姿勢 3

(2)「生成」という理念の継承—フンボルトからチョムスキーへ 4

(3) 言語知識の記述 6

(4) 思考システム・文法・音韻システムのインターフェース 7

(5) 深層構造はなくなったか？ 10

(6) 概念の恣意性と意味の言語的偏差 11

(7) 言語形式の形態的分類—「ミル」の形態論 13

(8) 言語形式の形態的分類—「ムカウ」の形態論 15

(9) 形態論と統語論の交叉—中国語の使役と日本語の使役 18

(10) ニヴフ語とアイヌ語の使役構文 20

(11) 動詞の語彙的意味の認識 23

(12) 参加者の調査研究等の報告 25

(13) アイヌ語① アイヌ語の「系統」 25

(14) アイヌ語② アイヌ語をめぐる最近の大きな動き 28

(15) Multilingualism① 典型的欺瞞：ドーデ「最後の授業」 31

(16) Multilingualism② 扼殺された善意 1：ソ連初期民族政策—『ソビエト的北方』1930-1935 について 33

(17) Multilingualism③ 扼殺された善意 2：ソ連初期民族政策—『タイガとツンドラ』について 35

(18) 母語について 38

はじめに

「言語学ゼミナール―言語の多様性と普遍―」は金子亨先生（千葉大学名誉教授、地球ことば村顧問）を座長にNPO 法人地球ことば村・世界言語博物館の活動の一環として開催されたゼミナールです。地球ことば村は、世界や日本のさまざまな言語・文化に関心を持つ市民が集まり、専門家やマイノリティ言語話者とともに、言語に関する知や問題を共有し、社会的課題に取り組む NPO です。シンポジウムや月例サロンなどのイベントと、ウェブ上の「世界言語博物館」などによる情報の発信を活動の二つの柱としています。

言語学ゼミナールは、金子先生からのご提案で、2008 年 7 月にスタートしました。その目的は、言語学専攻の方、あるいは言語学に関心のある方、なかで も若手の大学院生など を主な対象に、今ではあまり大学で教えられなくなったけれども大切な言語学のトピックについてお話ししていただき、議論するというものでした。また、より具体的な目標として、世界言語博物館に載せる言語の記述方法を検討することも目的としていました。ゼミは原則として、地球ことば村の月例サロンが始まる前に 1 時間程度開かれ、2010 年 6 月までに 18 回行われました。毎回のゼミのテーマは、目次をご覧いただければお分かりになるように、理論言語学や記述言語学から社会言語学まで多岐にわたっています。参加者は先生のご希望もあって 5〜10 人程度の少人数で、先生がお話しされる、ともすると難解なトピックにじっくりと向き合い、それぞれの知的関心や問題意識を深めながら、大変密度の濃い貴重な時間を共有しました。なお、第 18 回のテーマは「母語について」ですが、これはもともと「母語について①」で、第 19 回にその続きを行い、その後は各参加者の研究発表となる予定でした。

金子先生は、毎回のゼミナールの前にゼミでお話しされる内容の レジュメを作成してくださり、授業の後にはお話しされた内容の報告をまとめてくださいました。 これらの報告はすべて地球ことば村のウェブサイトに掲載されていますが、それを一冊にまとめたのがこの報告集です。（最終回となった第 18 回については報告をいただくことができなかったため、事前に配布されたレジュメを載せました。また、毎回のゼミのタイトルには、本報告集の編集にあたって新たに加筆 したものがあります。）

この報告集を編集するにあたって、ゼミナールの報告を通読しながら、言語について研究していく上で、また現代の社会言語学的課題に取り組んでいく上で考えておくべき重要なエッセンスが 、2 年にわたるゼミに通底する大きな流れの中に凝縮されて散りばめられていることに 改めて気づかされました。 読者の皆さまが研究活動を進められたり、言語に関する知識を深められたり、実践的な取り組みをなさるときに、この報告集がお役に立てば幸いです。

地球ことば村の大きな柱でいらした金子先生が 2011 年 9 月に亡くなられてから 1 年の月日が経ちました。今もことば村メンバー一同深い喪失感に包まれていますが、先生とご一緒に進めてきた活動をより一層発展させ、よりよい社会の実現に向けて活動に取り組んでいきたいと思います。金子先生に心より感謝を申し上げるとともに、ご冥福をお祈りいたします。

2012 年 9 月

NPO 法人地球ことば村・世界言語博物館

（編集：運営委員 佐野彩）

言語学ゼミナール（1）言語記述の基本的姿勢

2008 年 7 月 19 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

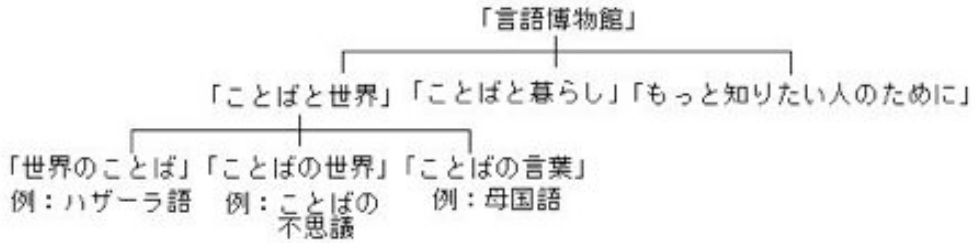
慶應義塾大学三田校舎 108 教室

ことばについて書くときにはきまってかなりの背景知識を必要とします。ある個別の言語について書く場合にもその言語の由来や類別や基本的な構造などについて基本的情報をそろえなければなりません。この基本情報は現在では、例えば 『言語学大辞典』（三省堂）などのような専門的な辞書を参照できれば、 さほど苦労せずに手に入ります。しかしその情報をまっとうに表現して伝えるのは結構難しいものです。

このゼミでは若い研究者が言語について書くときにぶつかるだろう難題、つまり言語情報をまっとうに書くための方法について考えて、現在ではあまり教室で教わらないような先人の思想や方法を論議したいという意図で始めることにしました。

しかし言語学ゼミナール第一回目は、このゼミの目先の目標についての大まかな話をするだけに終始してしまいました。 その大要は次のようです。

ことば村のサイト「言語博物館」には次のような項目があ ります。（編者注：2008 年当時）



この中で「世界のことば」では従来、比較的小さな言語で社会的・文化的に何らかの問題に関わった言語を取り上げて、概説をしてきました。概説の柱にしてきたのは次の５項目です。

１）系統と類型、２）構造の特徴、３）社会的状況、４）人々の暮らし、５）簡単な用例

この内、系統、類型、構造特性については出来るだけ一般的に認められている見解を大事にするように心がけてきました。当の言語をめぐる社会的状況に関しては、その言語を取り上げた動機に焦点を当てるように努めました。例えば、ハザーラ語では、この言語がアフガニスタンの少数被圧迫民族であり、バーミヤン石窟地域に住む人たちの言語であることなどがこの言語を取り上げるさしあたりの動機でした。この基本的情報にたいしてそれを使う人々の暮らしや、日常会話などの簡単な用例を付け加えて、人々とその母語に親しみを持てるように書くように努めました。

このような書き方は言語概説というものの基本で、それぞれになかなか難しい課題です。ひとつひとつの課題についてさらに検討するべき事は多くありますが、今回はそれに論議を及ぼすことはしませんでした。

「ことばと世界」の第 2 の項目「ことばの世界」では、まだ細項目を系統的に作っていません。いままでに提案されてきたいくつかのエッセイを集めてあるにすぎません。この項目にどんな話題を入れるべきか、ことばの世界というものをどう考えるべきかを改めて考えたいと思います。

「ことばの言葉」の項目ではいまのところ母語などに関するエッセイが一つあげられているだけで、これは「ことばの世界」に入れるべき項目のようです。この欄にはもともと言語学用語を入れる予定でした。今のところ、約 200 項目の言語関係の用語集を制作中なので、これもいつか話題 に乗せましょう。（編者注：その後、財団法人国際コミュニケーション基金 2008 年度助成金により、項目の一部が掲載されました。）

いずれにせよこれらの項目を書くときは、いわゆる「言語論」を超えて、今日の言語をめぐるさまざまな問題を的確にとらえることを基本的な姿勢としたいものです。記述が信頼できて、分かり易く、さらに異なった見解にてらして公平で正統的な記述であること、全体として品位をたもった物言いであることが要点になるのではないかと思います。

次回は言語記述方法論の歴史から重要と思われる問題を拾いたいと思いま す。まずはチョムスキーが 1965 年に「生成 generative」について触れたとき、それをフンボルトの Spracherzeugung の意味だと述べたことについて話したいと思います。なお参考書は要りません。

（金子　亨）

言語学ゼミナール（2）「生成」という理念の継承–フンボルトからチョムスキーへ

2008 年 8 月 5 日（火）14 時 00 分－16 時 00 分

千葉大学総合校舎ユーラシア言語文化資料室

今回は言語研究の歴史のなかでの理念の継承という問題から話を始めました。

チョムスキーは 1965 年の *Aspects of the Theory of Syntax* の序論のなかで、彼の言う generative（生成的）という思想がフンボルト 1836『カーヴィ語について』の序説『人間言語の構造の多様性とそれが人類の精神発達に及ぼす影響について』で語られた Spracherzeugung（言語生成）という理念を継承したものであると語っています。チョムスキー達がその頃フンボルトのこの本についてセミナーをしていて、そこでこの問題もさまざまに語られたと伝えられています。しかし generative、つまり「generation 的」というのは数学的手続きを意味します。ある数式はきまってそこから別の値を作り出す（generate）のですが、この結果導出という因果を生成 generation と言います。チョムスキーの博士論文 The Logical Structure of the Linguistic Theory (1955/1957)でもこの用語がこの意味で使われています。しかしチョムスキーが「生成的企図」と名付けた言語思想では、言語が generative であるというのは、文法が規則の体系であって、そこへ音声的情報が入ると、文法の規則群が順次に規則正しくその情報を処理して、それを意味の情報に変換する、そのように文法の規則の系が、音声情報 →意味情報・音声情報←意味情報というように、異種情報を生成すると考えられたものでした。文法がこのような機能をもつ規則の系のつまったブラックボックスであるという考えは、たしかにたいへん素朴ではあったけれども、生成の仕組みの図式として一時期よく用いられたものです。

かつてフンボルトも精神と言語とが緊密に共同作業をすると考えていました。彼は心が言語を作り、また言語が心を作ると考えていました。この動的な過程を 彼は生成力 エネルゲイア（ενεργεια）と名付け、一方でそれが生み出したものを被生成物 エルゴン（εργον）と呼んで異なる次元にあるものと考えていました。この二つの概念のう

ちエルゴンの方は比較的に解釈が楽です。それはある言語の表現の総体やその個々の表現を示すと考えてよい。一方でエネルゲイアは「こころ」から「ことば」を生成し、「ことば」から「こころ」を認識する精神の働きを意味しますので、この「こころ」が前言語的であることは確かだとしても、それがどこまで言語に近いかがはっきりしません。例えば、日本語の発想と言われる概念を考えてみましょう。それは日本語の表現を作るための、まだことばになる前の考えを指しているようです。あるいはことばになってしまった表現の奥にある独特の考え方を指すと見てもよいようです。またそこで「ことば」と言われるものも、それが個別言語の音声となってしまったものを指すのか、それともある言語の文の意味を指すのか、ひょっとすると X 語の発想が言語化された言語のうち限りなく「こころ」に近い段階を指すのかが決して分明ではありません。フンボルトはこれらの理念との関わり合いで「内的言語形式 innere Sprachform」という理念を提起していますが、これを「ことば」に一番近い「こころ」と考えていたのではないでしょうか。

エネルゲイアという言語思想を歪曲して母語信仰の育成に利用した言語学者も　いました。いわゆるサピア・ウォーフ仮説（サピアは冤罪です）もそれに該当しますし、日本にも最近わけの分からない素人の妄言が流行っています。しかし極端にワルだったのは Leo Weisgerber（1900-1984）だったようです。一時期ドイツの言語教育学会に君臨したボン大学言語学教授でした。ここでは主著『母言の法則』を名 指すだけにとどめます。

言語理念の継承という問題で、もう一つ脱線をしました。フンボルトが外的言語形式（「言語の音声体系」の項）と内的言語形式（同名の項）の結合について触れたところで、ソシュールのシニフィアンとシニフィエに言及しました。そこでシニフィアンというのは要するに概念につけたタグなのだが、このタグは今我々が日常に見るようなさまざまな種類のタグよりはるかに複雑で、その情報は脳組織の多くの深い所に関係しているはずです。それは人類が人類になるはるか前から精密に作り上げられたもので、その意味ではシニフィエより古い歴史をもっている脳神経的に大きな多機能のモジュールではないかと付け加えました。また、音声のタグの先についている概念も複雑で膨大なモジュールであるはずだが、これも音のタグに匹敵するほどに複雑ではないかと疑問を呈しました。ソシュールは彼の時代に記号 signe から、その能動的側面 signifiant（シニフィアン）と被動的側面 signifié（シニフィエ）の二つを取り出して見せてくれたのですが、私達の仕事はそれらの内部にきちんとメスをいれることではないかと述べました。このことについては後にまた戻ってきましょう。

本題にもどって、エネルゲイアの双方向言語生成についてもう少し考えましょう。それには先にあげた内的言語形式という概念を丹念に調べる必要がありますが、手始めに手元の問題から始めましょう。チョムスキーが *Aspects*（1965）近辺のいわゆる標準理論の時期に提起した深層構造やその発展形式の D 構造と言われてきたものについてまず誤解を解いておく必要がありそうです。

次回はこの問題から話を始めましょう。

（金子　亨）

言語学ゼミナール（3）言語知識の記述

2008 年 10 月 11 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 523-A 教室

前回はチョムスキーの生成 generation という理念が一世紀前のフンボルトのエネルゲイア（ Energeia, Spracherzeugung）の理念を継承したものであることについて話しました。この理念の継承には、思想の発展が随伴します。チョムスキーの博士論文『言語理論の論理構造』（1955/1975）では言語の文法が派生規則の系であることを示し、その規則が正当に生成する文を適確 well- formed な文と評価するという理論が展開されました。

この適確な文によって表示されるものは、ひとつのまとまった思考内容です。そしてこの思考内容がふつう「文の意味」と言われるものに当たりますが、この文の意味の中核をなすのは言語知識 linguistic knowledge です。言語知識とは、さまざまな言語の個別の文法に入力されてその言語の文をつくるための概念的な入力情報であると考えておきましょう。では、この言語知識には、一般に語用論的な情報は含まれないのではないでしょうか。例えば、山登りの道すがらの挨拶のかけ声やその意味などは言語知識 の延長ではあっても、ひとまず別の情報と考えておきましょう。それはちょうどある音がどの方向から来たのか、それは威嚇的であるか友好的であるかというような音声にともなう情報が前（＝非）言語的であるのと比べてもいいのではないでしょうか。ヒトの言語知識はこのような一語用論的情報を少なくとも理論的には分離して分析できるものと見なせるのかも知れません。

［ここで、大切な質問がありました。では、ヒトの言語をどう定義するのかという質問です。この質問への暫定的な答えは次のようなものでしょう。ヒトの言語は二重分節 double articulation＜André Martinet という操作に依存して出来ている。つまり、それは意味を持たない最小分割単位としての音素から構成され、その音声の合則的な連結が意味を持つ最小の単位である形態素をつくる。この二重の音声的単位の集積がヒトの思考を表示するための記号の担い手（＝signifiants、つまり言語知識の音的なタグ）を作ると。］

文は基本的に言語知識の表現ですから、文の意味の記述とは、言語知識の記述です。この記述にはさまざまな方法が可能です。そのうちの主なものを並べてみましょう。

a）一階述語論理を用いて

例：鯨は哺乳類だ（全ての x について、x が鯨であれば、x は哺乳類だ：∀x 鯨(x) → 哺乳類(x) ）。

b）機械言語では

例：Prolog/KR（中島秀之） チューリングは人間です ：（assert（human, Turing））

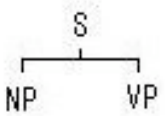
c）生成意味論では（＜J. D. McCawley 1968/69）

例：x kill y = x do(cause(become(not(y alive))))

（x が y を殺すというのは、y が生きていなくなってしまうように x が行動すること）

d）PSG（Phrase Structure Grammar）

例：S → NP + VP



その変種

例：GPSG, etc.

他にもまだいくつかの記述方法がありますが、ここではこの 4 つを問題にしてみましょう。この 4 つの方法はどれも言語知識の記述方法としては同じ効力をもつようです。つまり 4 つとも記述的に等価であると言ってよいでしょう。ですからどれを選ぶかはどれが当面の目的にとって読み易いかという基準に従えばいいように見られます。また場合によってはどの記述法に従うと機械が読めるかという選択方法もあります。これらの記述はどれも次の図の思考システムと文法規則系とのインターフェースにある情報です。次にこの知識情報が思考システムに属するのか、それとも文法規則系のなかの LF（Logical Form）に属するのかを考えてみましょう。

次回はこの問題から考えていきましょう。

（金子　亨）

言語学ゼミナール（4）思考システム・文法・音韻システムのインターフェース

2008 年 11 月 22 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

株式会社オフィス・ヘンミ会議室

１．句構造連鎖

前回の最後にあげた図（中島平三「統語論」『言語の事典』朝倉 書店, 2005, p.80）では、ヒトの言語の文法がその思考システムと調音システムとに介在するこころの機能であるということが示されています。これを再掲します：

（図 1）

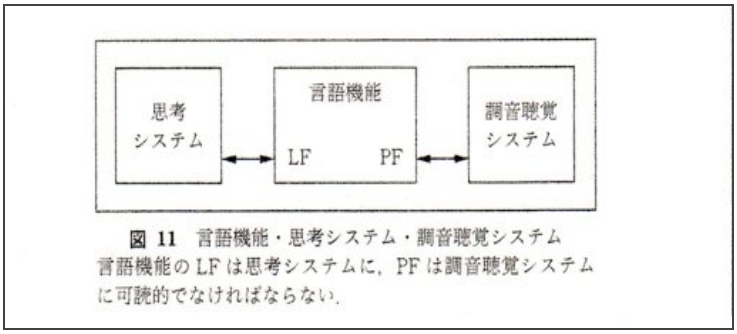


図 11　言語機能・思考システム・調音聴覚システム
言語機能の LF は思考システムに，PF は調音聴覚システムに可読的でなければならない．

これらのシステムの間には**可逆的・双方向的な情報の流れ**があります。その情報はこの過程のどこでも読めなければならないから、**根本的に同型**（homomorphic）であるはずです。しかしそれぞれのシステム内部で独特の形式をもっていると考えていいでしょう。例えば、文法の内部では、さまざまな段階の言語記号の群が隙間なく連続しているはずです。ノーム・チョムスキーの 1968-77 年代の考えでは、文法の内部では句構造が文法規則によって **隙間なく順次に派生**されているとされました。簡単に図示すると次のようです：

(1)

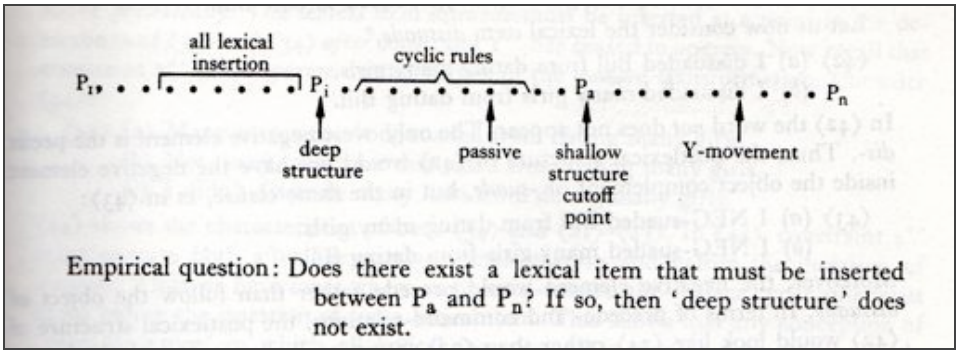
a. 句構造（Phrase Structure, P）導出（＝派生）過程：　$P_1, \ldots, P_i, \ldots, P_n$

b. 導出（派生）規則 derivational rules の介在：　P_{i-1} ＜派生規則＞ P_i

この考えでは、おおまかに言って、P_1 が図 1 の言語機能の LF に相当し、P_n が PF に相当します。これらを結ぶものが派生規則であって、それが全体として文法機能を作っているということになります。

しかしこの頃、このような句構造派生の考えをさらに一歩進めて、salto mortale（死の跳躍）を試みた一群の人々がいました。彼らはこの同型的導出過程が P_1 を超えて左に延びることを主張しました。その典型的な例が次の図です：

（図 2）



（George Lakoff: On generative semantics. in D.D. Steinberg / L.A. Jakobovits: *Semantics, An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. Cambridge Uni. Pr. 1971 (1st ed.), p.247）

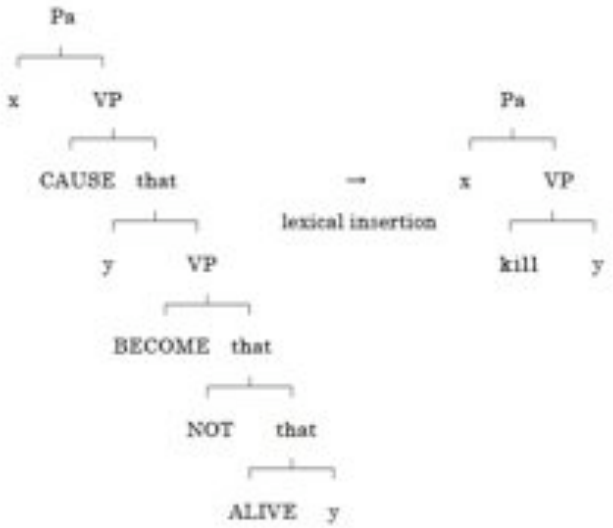
この all lexical insertion の部位で何が起こるかを典型的な例で見てみましょう。いま、 (2a) のような句が (2b) のように分析できて、大略 (2c) のような句構造をもつとしましょう。

(2)

a. x kill y

b. x CAUSE that y BECOME that it does NOT the case that y is ALIVE

c.



（J.D. McCawley 1968-69 のアイディア）

この時、図 2 の deep structure の左の all lexical insertion のどこかで CAUSE 以下の句が語彙項目 kill に置き換えられるというのです。このアイディアは語彙情報と文法的な統語情報とが同型であるという思想に基づいて、図 1 の LF の左にある概念的システムの情報を句構造として表示して、それを辞書項目挿入規則によって文法の内部にはめ込むと考えたものです。この考えが生成意味論 generative semantics の根本にありました。

チョムスキーはこの考えに反対し、語彙情報を句構造に取り込むときに語彙はそれ以上に分解してはならないと考えました。つまり図 1 の LF の要素は語彙情報である というのです。この立場は語彙論的と呼ばれました。一方、語彙挿入を主張する立場は変形論的 と言います。後の論争で後者の立場は敗北します。生成文法の本流は語彙論的に発展していくことになります。この問題についてはその後もさまざまな論議がありましたが、ここではその論議の経緯を回顧することはさし当たり割愛します。ただ一つ注意しておきたいのは、その後も多言語情報処理の分野（例：機械翻訳）では類似の語の分解 lexical decomposition の方法が用いられてきたことです。

２．システム間インターフェース

図 1 には二つのシステム間インターフェースがみられます。第一は左の思考システムと言語機能（文法）との間、第二は文法と調音システムとの間です。第一のインターフェースは思考と言語との、第二のそれは文法と音声との間にあります。

まず、第二のインターフェースを見ましょう。

２．１．文法・音声間インターフェース

文法の音韻論側の出力は音素の連続という形だと言われています。それが図 1 の文法システムの右側にある PF だと考えられます。一つの文の音素連続が音声的に実現されたとき、それぞれのシステムが与える情報に過不足があってはいけないはずです。しかしこの側の出力にも問題があります。例えば、次のような文を見ましょう。単なる音韻的出力では、(3a) の終助詞 /ne/ の多様なニュアンスは音韻的にどう表示されるのでしょうか。文 (3b) の裸の名詞「熊」は恐怖、警戒、愛着、食欲など 、どのような表情の言語表現なのでしょうか 。また (3c) の表現は交感的使用（phatic communion＜Bronisław Kasper Malinowski（1884-1942））として使われたときにはどういう音になるのでしょう？

(3)

a. あぁ、これね。

b. 熊。

c. はぁーい。

これらの言語情報を文法はどのように表示して音声部門へ出力するのでしょうか。ここで問題にした表現の表情、そこに込められた心情、人間関係構築の意思のようなものが文法とどのように接しているかという問題はまだよく分かっていません。それだけでなくよく研究されてきていないようです。またそもそもその問題はこの文法・音声間のインターフェースの右側の、つまり文法の問題なのでしょうか。それとも言語学の外側にあることがらなのでしょうか。

この問題は別の機会に討論することにしましょう。

ここではもう一つの側のインターフェースについて主に考えることにしましょう 。

２．２．思考システムと文法とのインターフェース

言語機能システムの内部と思考システム内部の問題をさしあたり方便として分けて考えてみましょう。文法内部の問題での第一の問題は、その要素がどのようなものかです。

次回は**文法形態**についての基本的な問題を考えてみましょう。

余裕があれば下の服部先生の論文をのぞいてみてください。

２．２．１．文法形態

言語知識表現は普通、形態上次のように分類されます：

1) 形態素 morphemes（有意味な最小形式）から出発して：

a) 語（彙）：自立語、付属語、付属形式

（**注意**：服部四郎「付属語と付属形式」『言語研究』15 号（『言語学の方法』岩波書店, 1960, pp.461-491 所収））

b) 接辞 affixes（接頭 pre-、接尾 post-、接中 in-、周接 circum-）

c) 小辞・倚辞・接語 clitics：古印欧語で自立的アクセントのない小語

（金子　亨）

言語学ゼミナール (5) 深層構造はなくなったか？（2009 年 1 月のことばのサロン）

2009 年 1 月 24 日（土）午後 2 時－4 時 30 分

株式会社オフィス・ヘンミ会議室

※第 5 回言語学ゼミナールは、地球ことば村の月例サロンとして開催しました。

「深層構造」というのは 40 数年前にノーム・チョムスキーが提示した概念です。それは生成文法の標準理論と言われる理論体系の中で重要な役割を果たしました。彼の考えでは、それは生成変形文法が紡ぎ出す一連の句構造のなかで、語彙項目が入った一番基底にある構造とされましたが、その存在について後の生成理論の内部の二つの面から　深刻な疑念が出されました。一つは、生成意味論といわれる理論から、もっと基底に語彙挿入という操作が働く構造があるのではないかという 疑念、もう一つの変形主義的理論からは、句構造派生のずっとあとでも語彙を入れたり、入れ替えたりする操作などの操作が必要であるので、特別な一枚の句構造は存在しないというものでした。

「深層構造」の存在は、このように生成理論内部からも危ぶまれたのですが、外側からもさまざまな誤解を生みました。その一つが、「深層構造」を言語普遍と勘違いするひとたちがいたことです。そしてその後の生成理論の発展のなかで、「深層構造」という一枚の句構造があるという考え方はなくなりました。しかし文法が作り出す文は、その構造が過不足なく解釈できて意味を与えなければなりません。そのためには、人の言語的思考に一番近い形式を作り出す形式的操作が文法の仕組みに組み込まれているはずで、そ

のような意味的な構造が生成されなければならないことは一度も疑われたことはありません。いまの生成理論ではその構造を論理形式と名付けています。要するに、1960 年代の考えは否定されたが、その中身は文法が生成する基底の構造という形で生き残っているのです。

しかしなぜこんなことを今更ほじくり出さなければならないのでしょうか。理由は二つあります。第一は、いま発展しつつある認知理論の片割れに人の概念を形式化して表示しようという試みがあります。それは言語学的な意味論なのだろうかという疑念が生まれます。文法と言語外的認知のインターフェースの境にあって、言語のなかの事実を書いているのか、それとも言語の外の話なのか、その点を方法上もきちんとして、研究しているのかを確かめなければなりません。第二に、論理形式と言われているものが言語に共通なのか、言語ごとに変わるのか、変わるとするとどこがどう変わるのかという問題です。一歩進めて言えば、論理形式やその操作の類型論はあるのかという問いです。ともに言語研究内部の問題ですが、これら二つの問 に答えるために、「深層構造」を振り返って 、みる必要がいまあるのではないでしょうか。

（金子　亨）

言語学ゼミナール（6）概念の恣意性と意味の言語的偏差

2009 年 2 月 28 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス大学院棟 334 教室

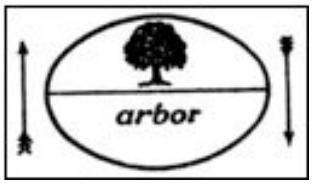
今回は新しい参加者が何人かおられたので、ことば村言語学ゼミを始めた動機とか司会者の心づもりなどについて話しました。そのために予定した話がほとんど先送りになってしまいましたが、改めて初心を思い出すのはよかったと思います。

この言語学ゼミはもともと地球ことば村をよりよく運営するための勉強会のつ もりで始めましたが、始めてみると、今とこれからの言語研究の理論と方法についてこれだけは押さえておこうという問題をいくつか論議しておくことが大切だと思われました。実際の言語記述の際のポイントや言語問題の捉え方について話をすることになりました。

前回はちょうどサロンの予定がなかったものですから、1 月のサロンと合体して 11 月までにゼミで話題にしていた「深層構造」の問題について話しました。大略次のような話です。前世紀の中頃から、言語構造の記述には句構造という分析手段が使われてきましたが、それは「名詞句、動詞句」などの抽象的カテゴリー、そのカテゴリー間の関係、それに語彙要素からなる形式構造とされています。句構造は何層にもなっていて、それぞれ変形・併合などの文法操作で連なっています。それを句構造の派生といいますが、その最初の、思考形式に一番近い派生形式が「深層構造」と言われてきました。最近の生成理論では「論理形式」と言われる構造です。ここで大切なのは、「深層構造」が語彙要素と抽象的文法カテゴリーの間の階層構造であるという点です。この階層　構造は抽象的カテゴリーと語彙要素と、それを結ぶ構成要素関係と配列関係という二種類の関係によって組み立てられています。この考え方は過去 60 年ほどの生成理論の歴史で変わらない原則でした。言語記述をするとき、例えば生成文法の方法

を使わずに先住少数民族言語の構造を記述する場合でも、この原則に配慮することが大切だと思います。詳しくはサロンの報告をご覧ください。

さて 2 月 28 日のゼミでは、「深層構造」や先住民族語研究にとって大切な論点を言語研究の歴史をふまえてひとつ取り出してみました。



フェルディナン・ド・ソシュールが 20 世紀初頭に新鮮な言語記号論を提起したことは知られています。彼は言語記号が二つの側面、概念と音響印象から成り立つとして、右のような図を書いたと言われています。上が記号の概念、下が音声です。この 2 部分の結びつきは「恣意的」で、「木」を表すに当たって個々の言語はそれぞれ勝手な音声を使うと指摘されました。そして概念の方は言語の別にかかわらず、コンスタントだと暗黙に了解されていたようです。後にイェルムスレフが色彩語の場を引き合いに出して、概念も言語によって多少はずれると言ったのですが、今までのところ一部の「言語相対論者」を除いて、この問題はまともに論じられてきませんでした。しかしやはり概念も個々の言語によって一定の幅でずれるというのが真実でしょう。つまり「恣意性」は音声だけでなく概念の側にも原因があると考えるべきでしょう。

ノーム・チョムスキーは 1960 年代の始めに「深層構造」が「全ての言語に共通」であると書きました（『デカルト派言語学』）。文の意味解釈への出力があくまで論理的構成体であると考えたからだろうと思います。この理念は今日のモデルの「論理形式」にも見られます。つまり言語による意味的偏差が原則としてパラメータに委ねられています。しかし句構造形式だけにパラメータを設定するわけにはいきません。句構造には語彙要素が含まれていますので、その個別言語的偏差にも配慮しなければなりません。文法理論の進展の今日の段階では、そろそろこの問題を棚から下ろすことを考えなければならないのではないでしょうか。とりわけ「事象意味論」や「概念意味論」のように言語と認知や事象とのインターフェースが視野に入ってきたのですから、このように概念の恣意性や意味の言語的偏差と正面から向き合ってもいいのかも知れません。

そこで思い出すのは、かつてウィルヘルム・フンボルトが 19 世紀の初めに「内的言語形式」と「抱合形式」という理念を提唱したことです。ここでは概念と言語形式との個別言語性が問題とされました。またその一世紀後にはエドワード・サピアが言語構造の類型について「技術」と「総合」という軸を作って　形式構造の類型を捉えようとしました。この二つの思想については後に時間を見つけて別個に論議する必要があるでしょう。そしてその議論を有用なものとするために、まず言語の形態構造について考えてみましょう。言語要素の形態構造はもともと「論理形式」の要素ですし、概念の恣意性や言語の意味論的偏差の元でもありますので、その形式的あり方を心得ていなくてはなりません。いくつかの言語についてその基本的な形態構造を分析してみたいと思います。そのために、次回は、服部四郎「付属語と付属形式」（1950）を手懸かりに、形態分析をやってみようと思います。

（金子　亨）

言語学ゼミナール（7）言語形式の形態的分類 －「ミル」の形態論

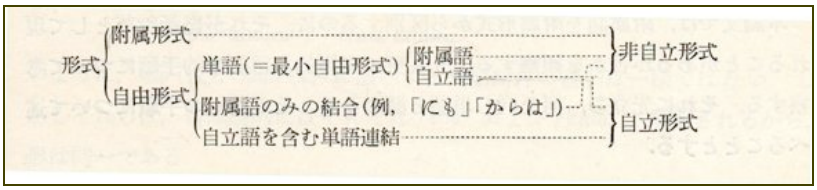
2009 年 3 月 21 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス大学院棟 334 教室

前回は新しい参加者が何人かおられたので、ことば村言語学ゼミを始めた動機とか司会者の心づもりなどについて話しました。そのために予定した話がほとんど先送りになってしまいましたが、改めて初心を思い出すのはよかったと思います。

さて、言語知識表現は形態のクラスに分類されます。

形態素を分類するという試みで今日もなお考慮されなければならないのは服部四郎　1950（「付属語と付属形式」『言語研究』15 号 ／『言語学の方法』岩波書店, 1960, pp.461-491）です。この分類は、日本語を含めてさまざまな言語に適用可能です。



形態素 morphemes（有意味な最小形式）から出発して次の類が分類されます：

a) 語（彙）：自立語、付属語、付属形式

b) 接辞 affixes（接頭 pre-、接尾 suf-、接中 in-、周接 circum-fixes）

c) 小辞・倚辞・接語 clitics：古印欧語で自立的アクセントのない小語

この服部 1950 の分類のうち、まず「単語」に注意してみましょう。単語は付属語と自立語に分かれます。このうち付属語というのが彼の提案で珍しいものです。たとえば「見せられた、見させられた」という表現では自立語の「見、見せ」と付属語の「させ、られ」が結びつき、それに付属形式の「た」がついています。この分類基準ではこのような分析になります。しかし別の基準を立てることもあります。たとえば国立国語研究所が開発中の KOTONOHA では「大・小単位」という二文節単位を立てていますが、さらにその小単位内部を分節すると、このような形式の区分が出てくるでしょう。しかしことはそう簡単ではありません。動詞「見る」を例にとると、さらにやっかいな問題が見えてきます。

「見る」の形態論

『国立国語研究所報告 43. 動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所, 宮島達夫編著, 秀英出版, 初版 1972, 761pp. から、索引（語彙）「み」項のミルに関係する語をあげてみます。

「みあげた 676、みあたる 25, 681～682、みいだす **219**～220, 683～684、みうしなう 426、みえすいた 676、みえる **229**, 652, 659, 662～663、みかける **439**～440、みかねる 426、？みくびる 425、みせる 424, 673, 700、みつかる 25、みつける **219**, 220, 684、みつめる 479～481, 719、みてとる 426、みとめる **219**、みなす 350、みのがす 426、？みまう **466**～465、みまごう 678、？みまわれる 723～724、みる **326**～327, **439**～440, 654～664, 577, 684, 700 」

（**参考**：『ことばの意味』柴田武・国弘哲弥・長嶋善郎・山田進・浅野百合子（ 2, 3）（1 巻 1976, 2 巻 1979, 3 巻 1982. 平凡社選書各 47, 66, 73）では 2 巻 pp.70-77 に「ミル・ナガメル・ミツメル」がある。ここではこれらの語の間に「「網膜の 3 領域」「辞書の定義」「対象物」「心的態度」に差があると主張」）

上の表を整理してみます。

(a) 派生形容詞：みあげた、みえすいた

(b) 合成動詞

(1) [V mi=V]：みあたる、みいだす、みうしなう、みかける、みかねる、みのがす、みまごう

(2) [V mi=v]：みつける、みつかる、みつめる、？みとめる、みなす

ここで　V：独立語彙要素（生産的）

v：非独立語彙要素（同音語との意味の乖離）

(c) テ形：みてとる ＞（mi-te toru)

(d) 異語幹：？みとめる（mitome-）、？みまう（mimaw-）、みまわれる（mimaw-(r)are-）

(e) 派生動詞：みえる、みせる、みる

但し、ここで「=」は合成的結合を、「-」は派生的結合を示すことにします。

次にこれらの語の内部の形式構造を調べてみます。

派生動詞の構成

語構造	共通語根	派生接辞
mi-e-Ru	mi-	-e-
mi-se-Ru		-se-
mi-Ru		-φ-

ここで使用された形態素 morphemes：

mi-：視覚認知

-e-：非意志性自動詞（「非能格・非対格」）形成接辞

-se-：使役他動詞形成接辞

-Ru：非過去時制接辞 -Ru ＞ -ru　但し、母音音素の後

-u　その他の条件

接尾辞複合動詞の構成

合成動詞構造：語根＋自立動詞語幹＋派生接辞 n＋時制接辞

mi=age-Ru＞みあげる

テ形合成動詞：語根＋テ＋自立動詞語幹＋派生接辞 n＋時制接辞

mi-te to-Ru＞みてとる

テ形接合動詞：テ形合成動詞と同構造

mi-te mi-Ru＞みてみる

接頭複合動詞の構造

この類の複合動詞はあまり生産的でないようです。名詞抱合もわずかです。とくに「ゆめみる」は抱合的ですが、他動詞のままです。

例：ゆめみる、？わきみる、かえりみる、かいまみる、（古）うちみる、（古）ふりさけみる

＜参考＞　接頭合成名詞：よそみ、たちみ、 etc.

言語形式の形態的分類の問題にもどります。「見る」の形態分析からすると、次のような問題があります：

1）動詞語彙が自立語であるには時制終始語尾「る・た」までが現れなくてはならない。ではそれは自立語と言えるのか？

2）語根、語幹とそれに接尾・接頭する形態素が自立形式の内部に現れる。この要素はそれ自身が自立語・付属語、付属形式であり得る。では自立語内部要素はどんな形態単位なのか？

3）動詞語彙については自立語という形式単位は統語単位（移動可能）の認定としての意義があるにすぎないか？

4）付属語は統語単位としての意義があるのか？

5）以上は動詞語彙以外の語彙についても言えるか？

（金子　亨）

言語学ゼミナール（8）言語形式の形態的分類 －「ムカウ」の形態論

2009 年 4 月 18 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 514 教室

「ムカウ」の形態論　（「ミル」の形態論のつづき）

こんな問いから始めてみます：

次の二番目の歌の「ムカウ」はどんな動詞 ？（自動詞？方向動詞？非能格動詞？意志動詞？行為動詞？ …）

「汽車の窓　遙かに北に故郷の山見えくれば　襟をただすも」（前の歌＝文脈）

「故郷の山に向かいて言うことなし　故郷の山はありがたきかな」（石川啄木）

この「ムカウ」の意味を『広辞苑』（第一版 8 刷 1960、但し第一版 1 刷は 1955）で調べてみます。

むかう　→　「むこう」の口語

むこう（はひふふへへ）【向ふ、対ふ】自動詞ハ四

① 顔をその方向に回している

② おもむく、出向く「東京に向かった」

③ はむかう、さからう、抵抗する

④ 肩を比べる、相当する、匹敵する

⑤ 近づく、なんなんとする

⑥ 対する

⑦（取引用語）取引人がみずから客の注文に対して相手になって売買する。客に売向かう。

以上で例を全て略。その例は②、⑦以外すべて万葉集から。

ここであげられた意味の違いを整理してみます：

(1)「むこう」の語幹：*mukap- ＞ mukaw-

但し、 *p ＞ Φ ＞ h, w, Φ

(2)「むこう」の弁別的意味特性

①（顔をその方向に回している） versus ②（おもむく、出向く）

即ち：「対峙状態」 versus「対峙進行行動」（relational state：agentive act）

(3) 意味の派生：③～⑥ ＜ ① versus ②

派生の条件：③～敵対関係の場が前提

④～対比関係の場が前提

⑤～時間関係の場が前提

⑥～状態性の場が前提

(4) 派生語

派生接尾辞：むかえる（迎える） mukaw=e-Ru

<u>nota bene</u> -e-：mi-e-Ru の派生接辞と同じ？

mukaw-：自動詞（ニ格補語）

mukaw-e- :他動詞。但し、対象（theme）が向こうから来る → 態 genus 的に対応？

接頭辞：たちむかう tati-mukaw-Ru：非自立的接頭辞なので、抱合ではない。

ここで「ミル」「ムカウ」の形態論をまとめておきます：

	語根	語幹派生	項	意味の特性
ミル	mi-	-e-	theme（ガ）＋patient（ニ）	視覚認知状態
		-Φ-	actor（ガ）＋theme（ヲ）	視覚認知行為
		-se-	actor（ガ）＋theme（ヲ）＋patient（ニ）	視覚認知使役行為

ムカウ	mukaw-	-Φ-	object（ニ）＋patient（ガ）	対峙状態
		-Φ-	actor（ガ）＋object（ニ）	対峙進行行為

参考：中国語形態論

語根と語幹とを区別しにくい言語もあります。このような言語では次のような一般的な形態素の形式的分類が有効であるようには見えません。

形態素 morphemes（有意味な最小形式）：

a) 語（彙）：自立語、付属語、付属形式

b) 接辞 affixes（接頭 pre-、接尾 post-、接中 in-、周接 circum-）

c) 小辞・倚辞・接語 clitics：古印欧語で自立的アクセントのない小語

中国語はそのような形態的区別をもたない言語だと言われてきました。

しかしいまでは中国語にも次のような形式の別を認める考え方があります。＜　木村恵介『中国語における動補型複合動詞』（2007）：

１）付属形式

(1) 語根（-房-、-民-、-物-、-室-、-寒-、...）

(2) 疑似独立形式（氷、油、人、路、菜、牛、 ...）

(3) 屈折接辞（-了、-着、-達、-得、-的、...）

(4) 派生接辞（初-、第-、老-；-几、-子、-頭、-们、...）

２）　独立形式

(5) 語（書、我、給、你、...）

(6) 文節（那本書、我給你、...）

(7) 文（那本書我給你、...）

分析用の例文：

「陆丙甫（2008）在谈到汉语“的”和日语“の”的区别时，认为汉语“的”是描写性标志，日语“の”是指别性标志，并认为据此可以解释日语“遠い”、“近い”、“多い”等形容词通常使用连用形后加“の”做定语，而很少直接做定语修饰（具体）名词这种语言现象。的确，日语“の”在很多时候具有指别性，但也正如陆文所提及，日语“の”的使用具有很大的句法强制性，因此，能否明确断言其为指别性标志，笔者以为尚有探讨余地，将另撰文讨论。在此，仅就陆文中使用的几个日语形容词的连体用法进行探讨，并进一步论证日语形容词连体形做定语时的句法语义特征。」（湖南大学 張佩霞）

（金子　亨）

言語学ゼミナール（9）形態論と統語論の交叉 － 中国語の使役と日本語の使役

2009 年 5 月 16 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 514 教室

前回はまず「ミル」と「ムカウ」を例に日本語の動詞の基本的な形態を見ました。そこから得られた当面の問題を「報告 8」の表にまとめておきましたのでごらんください。

ついで形態論が「貧困だ」といわれている中国語に関して、中国語もいくつかの種類の非自立的形態範疇があるという主張（例：木村恵介 2009）を見て、例文を観察しましたが、今回はこの問題を一歩進めて、形態論と統語論との領域が交叉している例をひとつ見ました。

中国語では、サセルを次のように表現するとふつうの文法書では言われています。これらはサセルを表す語がある場合です。

(1) 老师叫我们提意见。（先生は我々に意見を言わせた）

(2) 这件事情使我们很高兴。（このことが我々を大変喜ばせた）

(3) 请你再讲一边把！（どうぞもう一度言ってください）

(4) 让我们共同进步吧！（私たち一緒に進歩しましょう）

しかし次のような文を見ましょう（木村 2009, p.111）：

(5) 敲门声惊醒了莉莉。（ノックの音が Lili を驚かして目を覚まさせた）

(6) 冰冷的河水冻木了我的脚。（冷たい川の水が私の脚をしびれさせた）

(7) 多年的辛苦累倒了他。（長年の辛苦が彼を疲れで倒れさせた）

これらの文にはいわゆる使役の助動詞がありませんが、2 動詞の複合のうち前の動詞 1 が原因で後の動詞 2 が結果したこと、つまり動詞 1 が動詞 2 を引き起こしたことが示されています。完了の了がつくことが条件です。この構文は「動補型複合動詞構文」と言われます。この構文自身が使役関係を表示します。

次の例を見ましょう。今度は動詞 1 も動詞 2 も動詞句を作っています。二つの動詞が複合していると言うより、二つの動詞句の複合と見られます。

(8) 喜酒喝醉了新郎。（お祝いの酒が新郎を酔わせた）（楊明 2009）

(9) 武松打死了老虎。（武松が老虎を殴り殺した）（同）

(10) 这个故事听烦了张三。（この話が張三を聞き飽きさせた）（木村 2009, p.67）

(11) 张三喝醉了（酒）。（張三は（酒を）飲んで酔っぱらった）（同 p.73）

(12) 张三闹忘了李四要说的话。（張三が騒いだので李四は話すべきことを忘れた）（同 p.81）

これらの文について木村 2008 は「V1＋V2 は形式の上から結果を含意することが意味として表されている」と言います（p.103）。つまり連続した二つの動詞句の間に因果関係があると言うのです。これを次のように表してみましょう。コは「…なので…になる」、つまり causation＝サセルを示すとします。

(8)　[新郎喝喜酒] ⊃ [新郎醉了]。

(9)　[武松打老虎] ⊃ [老虎死了]。

(10)　[张三听这个故事] ⊃ [张三烦了]。

(11)　[张三喝（酒）] ⊃ [张三醉了]。

(12)　[张三闹] ⊃ [李四忘了李四要说的话]。

問題は動詞句 1 も動詞句 2 も自動詞であっても他動詞であってもいい 、動詞句 2 が結果相を表して、それに了がついて、主語や目的語（句）が文末に配置されることです。この構文そのものが結果相の使役を表します。サセルを表す語彙がなくて、構文そのものがサセルと表すと考えてよいでしょう。この構文で用いられる動詞の意味的な特性（そのうち特に「動作様態」aktionsarten と言われてきた特性）について、また主語目的語などの項の配置に関してはまだまだ調べるべきことはあります。しかしここでは、中国語では特定の語彙ではなく、特定の構文がサセルを表すのに用いられるということを認識しておきましょう。

日本語の使役に戻ります。

「みせる」と「見させる」を比べてみます。共に使役的です。しかし「みせる」は使役性他動詞で「みさせる」は使役複合動詞です。この種の動詞構造がどのように脳内で区別されて処理されているのかに関して最近面白い研究結果が出されました。伊藤たかね「ことばの脳内処理－日本語使役構文の事例から－」『こころと言葉』東京大学出版会, 2008, pp.155-174 です。彼女は、例えば次のような使役他動詞とサセ使 役文とでは脳内でのそれらの理解の時間と場所が異なることを実験的に示しました。

(a) 父親が子供を自分の自転車に **乗せた**。

(b) 父親が子供を自分の自転車に **乗らせた**。

実験は事象関連電位 ERP（even-related potential）の計測によって使役他動詞がすんなりと認識されるのにたいして、サセ構文の脳内処理にはタイムラグが生じること、また特異性言語障害　（SLI）をもつ子供ではサセ構文の処理に困難がみられることをあげて、二種類の使役性表現が「異なる脳内メカニズムで処理されていることを強く示唆する実験結果を」示しました。図 9-4 をコピーしておきます。

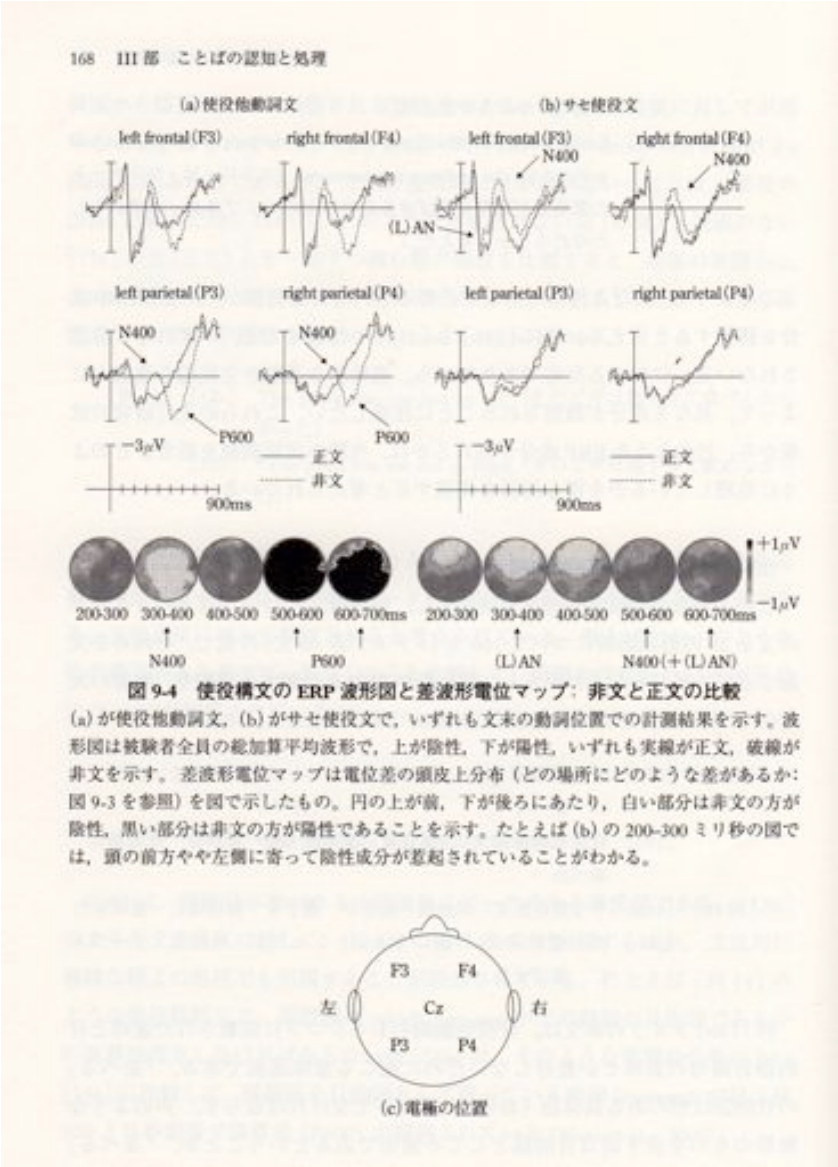


図 9-4　使役構文の ERP 波形図と差波形電位マップ：非文と正文の比較

(a) が使役他動詞文，(b) がサセ使役文で，いずれも文末の動詞位置での計測結果を示す。波形図は被験者全員の総加算平均波形で，上が陰性，下が陽性，いずれも実線が正文，破線が非文を示す。差波形電位マップは電位差の頭皮上分布（どの場所にどのような差があるか：図 9-3 を参照）を図で示したもの。円の上が前，下が後ろにあたり，白い部分は非文の方が陰性，黒い部分は非文の方が陽性であることを示す。たとえば (b) の 200–300 ミリ秒の図では，頭の前方やや左側に寄って陰性成分が差起されていることがわかる。

(c) 電極の位置

（金子　亨）

言語学ゼミナール（10）ニヴフ語とアイヌ語の使役構文

2009 年 6 月 6 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス第 1 校舎 108 教室

前回は第一に中国語のような「非形態論的な」言語では、サセルがほとんどもっぱら統語的なテンプレートによって表示されるという現象を見て、次いで、語彙的な使役性と形態・統語的な使役が違った脳内処理を受ける可能性について日本語の他動詞とサセル形に関する伊藤たかねさんの実験データを紹介し ました。

今日はまずニヴフ語を例にして、使役的他動詞とサセル型使役とが語彙的に同じでも統語的には異なった形式で表示される例を見ましょう。

ニヴフ語には本来的他動詞（例：indəd^{j}（みつける）, məd^{j}（聞く）, iχd^{j}/k^{h}ud^{j}/xud^{j}（殺す））のほかに自動詞と他動詞の組があって自動詞から他動詞を派生する形態論的な手続きがあります。そのうち規則的で生産的なものをあげると次の三つがあります。

(1) 語頭子音交替（自動詞は閉鎖音：他動詞はそれに対応する摩擦音）

（例：t^{h}ad^{j}（焼ける）：r^{h}ad^{j}（焼く）、rəkzd^{j}（なくなる）：vəkzd^{j}（なくす）、pild^{j}（大きい）：vilud^{j}（大きくする）

(2) 派生接辞 -u をつけて他動詞化する。

（例：lərkt^{j}（泳ぐ）：lərkut^{j}（浮かべる）、mχaqt^{j}（若い）：mχakut^{j}（若返えさせる））

(3) 派生語尾 -gu/-ku をつけて他動詞化する。

（例：ud^{j}（燃える）：ugud^{j}（燃やす）、pand^{j}（生える）：pangud^{j}（植える）

(1)と(2)は当面の問題と直接の関係がないので、接辞 -gu/-ku の場合だけを取り上げます。この接辞による他動詞文を三つあげてみます：

(1) n^{j}i p^{h}oɢla-ax təftox eɣ-gu-d^{j}-ra

1sg refl-child-ax house-DIR return-CAUSE-Fin-affirm

（私は自分の息子が家に帰るようにさせた）

(2) n^{j}i pajan-ax co ŋəŋ-t vi-gu-d^{j}-ra

1sg Pajan-ax fish take-Part go-CAUSE-Fin-affirm

（私はパニャンが私を連れて狩りに 行ってくれと頼んだ）

(3) i-ranr^{h} itt^{j}: n^{j}oɢla p^{h}-iɣrə-r paldox mər-gu-ja

his-sister said: my-child refl-belong-Part forest-DIR go=to=forest-CAUSE-Imp

（彼の妹は彼女の子供を一緒に山に連れて行ってくれと言った）

このうち(1)と(2)が使役構文、(3)は依頼を受ける人を示す語句 （p^{h}-iɣrə-r の p^{h}-（自分）である誰か）が省略されている例です。

こうしてこの言語の使役構文は、-gu をつけた他動詞に、その意味上の主語に-ax をつけた名詞句を加えて示します。ここでサセタ主体である行為者とその他動詞の意味上の主語である行為者の二人が文のなかに示されます。上の(3)の例では「彼の妹」と彼女から頼まれた人（p^{h}-iɣrə-r の p^{h}-）の二人です。この形態・統語関係を図式的に表しますと次のようになりましょう。

(4) [$_{S1}$ actor1 [$_{S2}$ actor2 (=NP-***ax***) [$_{VC}$ … [$_{VP}$ ... V-GU-Fin]]]]

ここで GU- (=CAUSE)は他動詞化接辞と言われてきました。たしかにこの接辞によって動詞の項がひとつ増えます。絶対格の項が増えたときは普通の他動詞化です。しかしこの言語には特別な格表示があります。それが -ax で表示される被使役者格です。この格の項が増えるとき統語的使役文がつくられます。上の (1) (2)の場合です。この言語の使役構文の特徴をまとめると次の二つになります：

(a) 他動詞化派生接辞 -GU によって項を 1 つ増やす。

(b) 同時にその項に絶対格ではなく、-ax 格を与える。

この格を従来ロシア人の言語学者は dative/accusative case と名付けていましたが、Grudzeva や金子は causee 格と呼んでいます。この格は人・生物の（有意志）行為者に限られていて、使役構造にしか出てきません。ですから agentive,

actor case などと言ってもよいようです。 この言い方を使えば、ニヴフ語の使役構文は他動詞化と行為者格付与の 2 要素からなることになります。

なお、この他動詞接辞 GU-（gu-/ku-）は、それだけでは使役構文を作るには不十分です。例えば、mud^{j}（死ぬ）：mugud^{j}（死なせる）のように強制力のない場合や、ced^{j}（乾く）：cegud^{j}（乾かす）のように目的語がモノを表す他動詞と変わらない場合があります。もっともこの接尾辞のついた他動詞は意志的行為の結果が示されるという点でいわゆる作為動詞 factitive の一類ですから、語頭子音交替や -u の接尾で作られる他の他動詞とは違います。その点で他動詞接辞 GU-（gu-/ku-）は特別な他動詞化接辞で、その点でこの接尾は他の他動詞化とは違います。

ここでアイヌ語の使役構文の例を見てみましょう。

アイヌ語にも特別な使役接尾辞があります。それは -re ですが、この接辞はそれが付く動詞の語尾がどんな音かで形を変えます。前動詞が母音で終われば、この -re で（V, y, w__）、p, t, k, s, m, n で終われば -te（p, t, k, s, m, n __）、m, n なら -ka（m, n__）、r で終われば -e（r__）になります。また san（下がる、落ちる）など移動の動詞の後ろでは -ke がつきます（移動動詞 n__）。この使役接尾辞付きの動詞と元の自動詞を加えると、例えば、他動詞の「それを食べる」は e、自動詞の「食事する」は ipe、使役動詞の「食べさせる」は e-re のようになります。使役文の例を一つあげます：

toan katkemat cep sinep kamuy utar e-re（佐藤知巳『アイヌ語文法の基礎』第 30 課, p.234）

あの 奥さん 魚一匹　熊　達 食べ-させた

（あの奥さんが魚一匹を熊たちにたべさせた）

使役動詞 ere の項は三つで、この例では cep sinep kamuy utar e（魚を一匹熊たちが食べた）では二項だったものに toan katkemat（あの奥さん）という項が加わります。これらの項はどれも絶対格で、格語尾は φ です。

ここでニヴフ語とアイヌ語の使役構文を比べてみます。共通点は二つ。 (a) 使役接尾辞が付いて使役他動詞が作られること、(b) それにともなって項が一つ増えること。相違点は (c) 増えた項にニヴフ語では -ax のような特別な格が付けられるのに対してアイヌ語ではそれが無語尾の絶対格でそのまま配置されることです。

さてここで日本語の語彙的使役とサセル型使役に関する伊藤たかねさんの ERP 実験報告を思い出しましょう。ニヴフ語とアイヌ語の形態統語的使役は、日本語のこれらの表現形式のうちサセル型使役に似ているのでしょうか？もちろんテストをして見なければ、何とも分かりません。しかしいままで見たところでは、二言語とも使役他動詞を作るだけでなく、その他動詞の項をひとつ増やす、しかもニヴフ語ではそれに特別な格標識をあたえることが分かりました。ですから他動詞の語彙的意味やその使役他動詞派生とう形態論的意味の認識だけではなく、その項関係の統語的な処理が加わります。脳内の処理ではおそらく項関係に関わる連合野との結合的処理が必要になるのでしょう。そのために日本語サセル型の脳内処理が行われるのではないでしょうか。

次回は動詞の意味の認識の問題に話を進めてみましょう。

（金子　亨）

言語学ゼミナール（11）動詞の語彙的意味の認識

2009 年 7 月 11 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス第 1 校舎 108 教室

前回までの推論の大切な問題は、使役性他動詞の認識とサセル型形態統語的動詞複合の認識では脳内処理の仕方が違うのではないかということでした。もしこの推定を一般化できるとすれば、語彙的情報と形態統語的情報が別の仕方で脳内処理されているのではないかと想像してもよい、それらの意味の形式構造もまた同型ではないかもしれないということになります。そこで今回はそもそも動詞の語彙的な意味とはどんな形をしているかという問題について考えてみたいと思います。

次の表はPukhta 2003の漁労語彙の一部です。

1　*coŋəŋd*^{j}
　漁をする
2　*rindid*^{j}
　氷下釣りをする
3　*k*^{h}*ezd*^{j}
　網を仕掛ける
4　*taxtld*^{j}
　網で魚を捕る
5　*lərkud*^{j}
　浮き網で魚をとる
6　*mər χupt*^{j}
　定置網を仕掛ける
7　***jilγud***^{j}
　流氷が溶け始めたときに帰るように漁猟にいく
8　***k***^{h}***əpt***^{j}
　流氷凍結後帰るように漁猟にいく
9　*mu vəγid*^{j}
　流氷時魚を捕る
10　*k*^{h}*erqod*^{j}
　魚を釣る

問題は7の***jilγud***^{j}と8の***k***^{h}***əpt***^{j}です。ともに1単語で派生語ではありません。つまり元になる類語がありません。Sabel'eva/Taksami 1970の辞書には ***jilkud***^{j}という語が登録されています。「帯を超えて持ってくる」の意味だとあり

ます。また***k^{h}əpt^j***に似た語では***k^{h}əprd^j***があって、「残る、留まる」の意味であるといいます。これらの語とどういう関係があるかは分かりません。また氷 ***lər***という語と関係のないことも面白いところです。

これらの語の意味は、生態学的に規定された固有の動作概念です。ちょうど「かも（醸）す」のような語彙で、分解・派生ができません。そのような概念と固有の音型がセットになってこのような語彙ができています。ここで問題が二つあります：

(1) このような概念は基本的に脳内長期記 憶装置に納められていると考えていいか。

(2) この概念の意味記述はどうするか。つまり、その固有の「内的言語形式」的な特性にはどのような記述をするべきか。

これらの問題にアプローチするための例題として、国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』1984（志部昭平編）からおもしろそうな動詞をいくつか選んでみました。

「まぎらす、なおる、はめる、ひたす、届ける、はやる、はずれる、もぐる、かかげる、編む、まとめる、つらねる、ゆがむ、めくる、ずれる、削る、あふれる、ふりむく、うつむく、まごつく　、あまえる、惜しむ、さとる、またぐ、なでる、吐く、しくじる、おだてる、ごまかす、なぐさめる、けなす、からかう、賭ける、あずかる、たがやす、炒める、漬ける、ゆずる、あずかる、綴じる、映える、滲む、錆びる、ゆでる、むす、実る、くびれる、腫れる」など

これらはどれも、さらに小さな意味要素には分解できないような一つのまとまった概念の表示です。このような概念をカントにならって統覚的概念と名づけておきましょう。

参考： カントと統覚

「およそ一切の思惟より前にあたえられ得るところの表象は、直感と言われる。それだから直感における一切の多様なものは、かかる多様なものがあたえられるところの主観における『私は考える』という意識に必然的に関係している。ところがこの『私は考える』という表象は自発性の作用である、従って我々はこれを感性に属するものと見なすことはできない。私はこの表象を純粋統覚（Apperzeption）と名づけて、経験的統覚から区別する、あるいはこれを根元的統覚とも名づける。かかる統覚は『私は考える』という表象を産出するところの自己意識〔自覚〕であって、もはや他の統覚から導来せられ得ないからである。」（カント『 純粋理性批判』（ I 先験的原理論 第一部先験的分析論 第一編第二章「純粋悟性概念の演繹について」第二節「純粋悟性概念の先験的演繹」〔篠田英雄訳, 岩波文庫版上, p.178〕）、（ ）内は金子の補填）

.....

この言語学ゼミナールも11回になりました。最初の出発点は、サイトを運営する上で基本的に大切な言語学の知識を共有しようという意図に従って、この数十年間によく語られてきた言語研究の考え方を順を追って反省してみようというものでした。最初に選び出されたのは「深層構造」でした。この生成理論の基本的な概念は、いま思い返してもやはり結構むずかしいものでした。そのために何度か横道にそれながら、50年に及ぶ言語研究の主な論議を辿ってきました。それは決して無駄足ではなかったと思います。なぜなら、とりわけ昨今「語彙分解」と称して

特に動詞の意味の要素を単純な論理式に分解する人たちがいます。その行為の行き着く先にどれほど思いを致しているのか不審なほどです。その問題の結論としては 今回11回にまとめた古い論議が役立つのではないでしょうか。

こうして「深層構造」論議から出発したゼミナールも一応の区切りにきたように思います。そこでこの道筋の論議はここで中断して、これからは新しい社会言語学的な論点に移りたいと思います。

次回は夏休みに調査研究にいらした方の 報告をお願いします。またその次はサロンの準備としてアイヌ語の話をしましょう。その後からは「Multilingualism 多言語状況」の問題を順次論議していきたいと思います。

（金子　亨）

言語学ゼミナール（12）参加者の調査研究等の報告

2009 年 10 月 10 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 514 教室

第 12 回言語学ゼミナールは、夏休みに海外で調査研究等を行ったゼミ参加者の 活動報告にあてました。各報告の要旨は、地球ことば村ウェブサイトからダウンロードできます。

第 12 回言語学ゼミナール報告： http://www.chikyukotobamura.org/forum/seminar091010s.html

報告 1：李林静「2009 年 8 月ホジェン語調査報告」

報告 2：山川智子「日本語教育の文 脈化を考えるー市民社会における “plurilingualism/pluriculturalism”概念の理解と CEFRー」（第 14 回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム（ベルリン自由大学）での報告（2009.09.03））

報告 3：佐野彩「夏期講座参加報告（3L International Summer School on Language Documentation and Description、ロンドン大学 SOAS、2009 年 6 月 22 日～7 月 3 日）」

（編集者）

言語学ゼミナール（13）アイヌ語① アイヌ語の「系統」

2009 年 11 月 14 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 513 教室

次回 2010 年 1 月のサロンは丸子美記子さんが 「アイヌに生まれて」というお話をされることになっています。また 3 月のシンポジウム「多言語社会　日本①」ではアイヌ語と琉球語（宮古方言）を取り上げますので、ここで 2 回ほど、アイヌ語とアイヌ語をめぐる動きについて考えてみます。

まず、アイヌ語についての基本的な論点についてみます。

１．アイヌ語の「系統」

「系統不明」

言語の系統というのは、任意の二言語について、共通の祖先となる言語（祖語）が再構成できれば、それら言語は系統関係がある、平たくいえば親戚であるということと考えられています。祖語の再構成は主として共通の語彙を求めることに依ります。一定の規則に従ってそれらの言語に共通の音をもつ語がいくつもあることが検証されなければなりません。一方、文法関係の共通性も問題にはなります。代名詞や語形変化など言語によって変わりにくい部分が一致することが目安になりますが、系統関係成立のためには、語彙の一致ほど大切ではないとされてきました。

このような点から見て、アイヌ語は他に親戚をもたない言語です。規則的な音の対応をもつ言語はどこにも見つかっていません。たしかにアイヌ語にはカムイ（～神）、イクパスィ（～箸）、ノム（祈る）、オンカミ（～拝む）などの日本語と似た語がいくつかあります。しかしこれらは祭礼などの分野や事物の移入（ウマの例）に限られていて、両言語の語彙のごく一部にしか妥当しないので、これらは系統関係を示すものとは考えられません。つまりアイヌ語は、いま分かっている限りで、親戚のない、孤立した言語であるとみなされています。

日本語とは無関係

アイヌ語は日本語とも系統関係があるとは考えられません。第一に、共通の語彙は上に触れたようにごくわずかで、分野も限定されています。音の対応に関する規則は、仮に想定したとしても、わずかの語にしか通用しません。語彙の借用や移入によってこのような関係がい くつか成立したと考えて不都合はありません。文法構造の面でも、両言語だけに見られる類似は見つからないというべきでしょう。動詞語順が文末であるというのは、総じて類型的特徴がそうであるように、系統関係とは無関係です。

しかしアイヌ語と日本語がふれ合わなかったともいうことはできま せん。アイヌというエトノスが成立したのが擦文文化からだという考古学的・人類学的な規定とは別に、アイヌ語はずっと昔から、遅くとも今から　5 千年前、紀元前 3000～2000 年の縄文時代中期から「日本」列島の北部で行われていた言語と関係があると考えても無謀ではないでしょう。

こうして、日本語とアイヌ語との接触は、やっと弥生文化の最初の時代、つまりどんなに早くみつもっても紀元前 1000 年～900 年に日本列島の西部で始まったと考えていいでしょう。

このように見ると、アイヌ語は他の北方のいわゆる古アジア諸語とは関係があったかもしれないが、日本語とはずっと遅くに狭い地域で接触しはじめたと考えられます。そしてその後の接触は 8 世紀に大和朝廷が東北侵略を企てたとき、松前藩があこぎな商売を始めたとき、また大日本帝国がアイヌモシリを大規模に侵略した後であると見てよいでしょう。こうして日本語はアイヌ語をだんだん北へ追い上げていったのですが、いまだにアイヌ語を殺し去るには成功していません。

アイヌ語と日本語との関係については次の研究が特に大切です：

中川裕「日本語とアイヌ語の史的関係」長田俊樹編『日本語系統論の現在』国際日本文化セン　ター, 2003（非売品なので大学図書館で検索のこと）

「古アジア諸語」との関係

東アジアの北東部には、いくつかの系統のよく分からない言語が割拠しています。チュコト半島からオホーツク沿岸までにチュコト・コリャーク諸語、その北方にユカギール語、カムチャトカ半島にイテリメン語、サハリンとアムール下流にニヴフ語などです。これらは新人が比較的に少ない集団でこの地域にやってきて、生態的に可能な生業を創造しながら住み着いて、そこで開発した言語であると考えられます。これらの言語は古アジア諸語と名付けられてきました。アイヌ語もその一つだと考えられています。それが使われた地域は日本列島中部以北、サハリン島南部、千島列島全域だと考えられています。もちろんこれらの諸言語の間にはまだまだ多くの言語が行われてきたことでしょう。例えば、飛騨の山奥とかにはさらに小さな集団の言語があったのではないかといわれてきました。いずれにせよ、考古学年代の新石器時代末にはこのようなエトノスの集団がこの地域に広がっていて、アイヌ語もその古い仲間であった可能性があります。

「縄文語」との関係

ここでアイヌ語と縄文時代の人々の言語との関係が取り沙汰さ れます。しかしそれがアイヌ語とどのような関係にあったかは分かりません。 **参考**：小泉保『縄文語の発見』青土社 , 1998

「三内丸山語」との関係

しかし確実に言えることがあります。それは、青森の三内丸山遺跡の研究から分かった縄文時代中期の広域の通商関係から、その当時の都市を中心とする交易圏で少なくともひとつの広域通商語があったはずだということです。これを仮に三内丸山語と名付けてみましょう（金子亨「言語起源論」の後半（中島平三編『言語の事典』朝倉書房, 2005））。この言語は北海道を含んだ地域で使われていた でしょうから、後のアイヌ語と関係があったでしょう。その言語は日本列島だけでなく、大陸北東の一部に広がっていたと主張する考古学者もいます（加藤晋平『シベリアの先史文化と日本』六興出版, 1985）。

２．アイヌ語はどんなことばか

アイヌ語が実際にどんなことばかを見るには別の機会を見つける他はありません。そこでここでは辞書、教科書、文法書をそれぞれ一冊ずつあげるだけにします：

辞書

・中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』草風館 , 1995

教材

・中川裕・中本むつ子『エクスプレスアイヌ語』白水社, 1997（改訂版があります）

文法書

・佐藤知巳『アイヌ語文法の基礎』大学書院 , 2008

参考：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編（奥田統己編集長）『アイヌ民族に関する指導資料』 2000

財団法人北海道ウタリ協会（現　北海道アイヌ協会）『アコロ　イタク　アイヌ語テキスト 1』1994

（金子　亨）

言語学ゼミナール（14）アイヌ語② アイヌ語をめぐる最近の大きな動き

2010 年 1 月 23 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス大学院棟 342 教室

今日はこのあと丸子美記子さん（関東ウタリ会会長）のサロンがありますので、そのための心覚えとして、アイヌ民族の最近の大きな動きについて見ておきましょう。

１．最近の大きな動き

アイヌ語再生の動きが目に見えるようになったのは、 1987 年以来のことです。この年の 12 月、東京で第 1 回アイヌ語弁論大会が開かれました（下の「参考：中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』書評」をご覧ください）。

そしてそれから 22 年後、2009 年のアイヌ文化振興・研究推進機構が主催するアイヌ語弁論大会「イタカンロー」（＝「しゃべろうよ」）では参加者人数 52 名と過去最大になり、レベルの高さも参加者同士で話題となっていたほどでした。

また、若いアイヌの人たちで、積極的にアイヌ語に関わろうとする人たちが増えていることも、ここ 5 年程の特徴です。特に、音楽や芸能の分野で OKI、Marewrew、Ainu Rebels などが、アイヌ語を積極的に使った活動を試みています。

最近アイヌの人たちの間で目立った動きがあります。樺太アイヌの子孫である北原次郎太氏が新設の北海道大学アイヌ・先住民族センターの准教授に、二風谷出身の川上将史氏もこの講座の技術補佐員になりました。札幌大学ではアイヌ子弟のための特別コース「ウレシパ」が開設されました。

これらは日本社会の中でアイヌ民族が堂々自己主張する場ができはじめたことを意味します。その象徴が Ainu Rebels 代表 酒井美直（Mina）さんの歌「e=katuhu pirka あなたはうつくしい」ではないでしょうか。

このような状況の背景に次のような公的な局面での動きがありました。

「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」報告（平成 21（2009）年７月）

自民党政権下の最後の「アイヌ政策」策定にたいする公的な見解です。今後の「アイヌ政策」の基本的な考え方として、

1.「先住民族」という認識に基づく政策展開、

2. 国連宣言の意義の尊重、

3. 基本的な政策理念：

(1) アイヌのアイデンティティの尊重、(2) 多様な文化と民族の共生の尊重、 (3) 国が主体となった政策の全国的実施を柱とします。

そのうち「アイヌ語をはじめとするアイヌ文化の振興」を見ますと、次のようです：

「民族としてのアイデンディティの中核をなすアイヌ語の振興については、北海道内を中心に財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構により、アイヌ語に関する指導者の育成、弁論大会開催、アイヌ語講座のラジオ放送等により

行われている。（中略）このように、アイヌ文化振興法の制定以降、アイヌ語などアイヌ文化の一部に対する振興施策が充実されたことにより、アイヌ語学習等への若い世代の参画がみられるなど文化伝承の裾野が着実にひろがってきている。しかしながら、アイヌ語を学びたい、アイヌ文化に触れたいというニーズに対して、それに応える場や機会が限られていたり、指導者や教材が不足する等の課題があり、必ずしも十分に対応しきれていない面もある。このため、アイヌ語等に関する講座や指導者の育成等の既存のアイヌ文化振興策の充実強化はもちろん、アイヌ語の音声資料の収集・整理、地名のアイヌ語表記やアイヌ語地名由来の説明表記を充実させて行くべきである。（後略）」

これに対してアイヌ民族の側からは即座に次のような反応がありました：

「「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」に対する「世界先住民族ネットワーク・AINU」からの提言」
（代表：萱野志朗、事務局長：秋辺日出男） 2009 年 4 月 21 日

「アイヌが日本の先住民族であることを国会が決議し、政府がこれを認めたことは、日本という国家が多民族、多言語からなることを明確に認めたことを意味します。したがって、日本語とならんで、アイヌ語も公用語とするための準備をただちに始めなければなりません。まずアイヌ語を義務教育段階で学べるようにすること、またアイヌ民族がアイヌ文化を習得したいときは何歳であろうとも学習出来る 機関を、国の責任において作ることを提言します。学習期間における生活の保障も必要です。教育制度についてはアオテアロア（ニュージーランド）、台湾などの、海外の先進事例を参考にすべきです。（後略）」

また、同提言では「アイヌ民族局」（仮称）と、選挙によるアイヌ民族代表機関の設立を提言し、そのロードマップを提示しています。

民主党政権では、先の「有識者懇談会」の報告を受けて「アイヌ政策推進会議」が構成されすでに始動しています。この推進会議の構成員には加藤忠北海道アイヌ協会理事長をはじめアイヌの人たちが多く加わっています。とりわけアイヌウタリ連絡会代表として丸子美記子さん、白老のイオル再生運動で中心的な役割を果たしている能勢千織さんが加わっていることが 見だっています。

もちろんこうした「官製」のアイヌ文化推進に対しては正当な批判が多くあります。しかし日本国家という支配者、少なくともマジョリティの組織であったものから、上に見たような見解と政策が出されることはやはり非常に大きな前進です。マジョリティの側が変わらなければならないという原理が貫徹される必要があります。アイヌとアイヌ文化とアイヌ語の社会的威信を高める必要があります。そのためには日本社会が多様な形でアイヌ民族とアイヌ文化とアイヌ語に関わる必要があります。

参考：中川裕著『アイヌ語千歳方言辞典』書評

「世界最初の使えるアイヌ語辞典」　『週刊金曜日』1995 年 6 月 9 日号，金子 亨

この本は、今、澎湃と興っているアイヌ語再生の運動への絶好のプレゼントである。著者の中川裕さんは、そもそもの始めからこのアイヌ語再生の歴史的な動きの中心的な推進力であったし、今もそうである。その彼だからこそこの辞典を産み出し得たのであって、またそうやって作られた辞典であるからこそ、運動を推し進めるための強力な武器になる。だが本格的なアイヌ語再生の運動がそれに関心を持っている人々の目にはっきりと見えるようになったのは、そう昔のことではない。象徴的な出来事は、1987 年末の「第一回アイヌ語弁論大会」であったろうか。それまではほとんど誰もがアイヌ語はもうダメだと思っていた。中川さんも僕も例外ではなかった。だから「弁論大会」が終わったとき、僕たちは涙を流して「ひょっとしてアイヌ語は本当に再生できるかもしれないぞ」と興奮して語りあったものである。

そのころ僕はアイヌ語の再生を母語の断続的継承の問題として捉えていたのであるが、ある日中川さんからこんな話を聞いた。昭和生まれの大多数は、親がアイヌ語を教えようとしなかった世代に属する。しかし、意外に多くのこの世代の人たちがおじいさん、おばあさんたちのアイヌ語を聞き覚えて、それを澱のように心の奥底に溜め込んでいた。そしてその人たちが今になって、アイヌ語を話し始めたというのである。

これはもう、民族の言語がそう簡単に殺されるものではないことを示した見事な証拠である。しかし大抵のアイヌの人たちは、日本語を母語として育ったために、民族のことばを外国語として学ぶほかはない。その人たちの民族学校として、いま北海道には 12 カ所ほどにアイヌ語教室が開かれ、年間で延べ 300 人もの人たちがアイヌ語を学んでいる。94 年にはそこで使うための教科書もできた。社団法人北海道ウタリ協会企画発行の『アコロ　イタク—アイヌ語テキスト 1 —』がそれで、中川さんはじめ数人の和人の専門家も参加して作った、アイヌのためのアイヌ語教料書第 1 号である。

しかしアイヌ文化再生の運動の進展をよそに、多くの大事なフチ（おばあさん）やエカシ（おじいさん）が他界した。92 年には、川上マツ子さんと木村キミさんが相次いで世を去った。お二人とも中川さんの大切な先生であった。そのどん底で中川さんの新しい先生になってくださったのが、白沢ナベさんであった。当時「千歳にすばらしいフチがいるんだよ」と、中川さんはうれしそうに語ってくれたものであった。そのころから彼の千歳通いが始まる。僕の部屋の隣の中川研究室のスチールケースには、ナベフチや山川キクさん、中本ムツ子さん等の声を録音したテープがだんだんと増えて、今では一段分いっぱいになってしまった。そしてこのテープこそがこの『アイヌ語（千歳方言）辞典』の総ネタであって、中川さんはこのテープを全部起こして、そこから語彙項目　3700 を取り出した。見出しの項目はアイヌ文字で出して、それにローマ字式の音韻表記、品詞、意味を書き加えた。さらに例文が付け加えられるのであるが、その例文の多くには［N9206021. UP］のような記号がついている。最初の N は、ナベさんの頭文字である。この N 印が例文のほとんどを占める。

だが、お元気だったナベさんが去年の 10 月 21 日に突然、帰らぬ人となった。中川さんはナベさんが元気なうちにこの辞典を完成させて、ナベさんのアイヌ文化継承運動のもう一つの成果として世に出したいとがんばっていたのだが、ついに間に合わなかった。この辞典は中川さんのナベさんへの献花である。

この辞典は、世界最初の使えるアイヌ語辞典である。今まで、バチェラー『愛英辞典』（1938／1991）、服部四郎『アイヌ語方言辞典』（1961／1981）、知里真志保『分類アイヌ語辞典　植物編・動物編・人間編』（1953／54、1975）などの辞典が書かれたが、それぞれに問題があったり、使い勝手が違ったりして、アイヌ語を初めっから学ぶためには、どれも役に立たない。今日までアイヌの子供が使えるアイヌ語辞典は、まったく存在しなかったのである。

でも、これは千歳方言辞典ではないかという向きがあるかもしれない。しかしナベさんさんのことばである千歳方言は、沙流方言と非常に近い。十勝から東の方言とはかなり違ってはいるというものの、そのような方言差は 、まず千歳・沙流のアイヌ語を学んでからゆっくり覚えてもよいではないか。ありがたいことに『アコロ　　イタク』はそのあたりの手当をきちんとしてくれている。それに『アコロ　　イタク』と『アイヌ語（千歳方言）　辞典』とは相性がよいので、各地のアイヌ語教室のアイヌの子供たちは、やっとまともな教科書と辞書とを手に入れたことになる。昨年は北海道立の「アイヌ民族文化研究センター」も設立されたし、ここでさらに必要なのは「アイヌ新法」などの手段によって、アイヌ文化を発展させるための制度を国民的に整備していくことである。

中川さんは、言語学は「実学」であるという。僕もそう思う。「言語学は何のためのものだ」という問いは、別に全共闘運動の専売特許ではない。僕は 68～69 年頃、ヨーロッパでこの問いかけに晒され、立ち往生しかけて以来、言語学はどの分野においても絶えずこの問いに晒されなければならないものと思っている。この辞書は、中川さんの言語学の「実学」性の成果で もある。なお、中川裕『アイヌ語をフィールドワークする』（大修館 , 1995）を併読されることをお奨めする。

（いろいろ旧聞に属することですが、 15 年前の状況を思い起こしてください。）

（金子　亨）

言語学ゼミナール（15）Multilingualism ① 典型的欺瞞：ドーデ「最後の授業」

2010 年 2 月 20 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

株式会社オフィス・ヘンミ会議室

昨年夏の 11 回目のゼミナールまでは、言語学の理論的な問題を扱ってきました（第 11 回報告の末尾をご覧ください）。その後 3 回ほどは、同僚達の調査報告やアイヌ語の問題など時期に即した話題を取り上げてきましたが、このあたりから見方を変えて、しばらく Multilingualism（多言語状況）に関わるいくつかの問題を取り上げてみたいと思います。

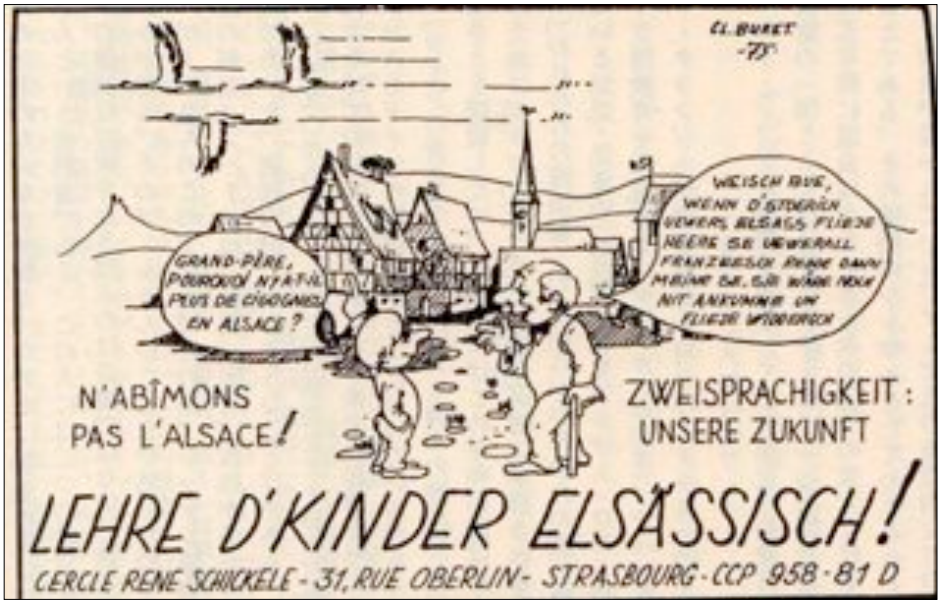
仮に現今の通説のように、ヒト（新人）がアフリカのエヴァの子供達だったとしましょう。その子達が巣立って各地に散りはじめたときから、ヒトの集団は否応なしに多言語使用者だったのでしょう。つまり多言語状況はヒト

の本来の姿だと考えても間違っていないでしょう。この多言語状況が危機に曝されたのはそう昔ではないようです。古代国家の状況はひとまず置くとして、多言語状況が本当に脅かされるにいたったのは近代国家の成立に始まったと言えるようです。まずその典型的な姿を見てみましょう。

「最後の授業--アルザスの一少年の物語 --」という誰でも知っているお話があります。アルフォンス・ドーデ（1840-1897）が普仏戦争（1870-1871）末期にフランス国民の戦意向上のためにパリの夕刊に書いたデマゴギーで、ザール川最上流の村のフランツ（ Franz）君が相変わらず遅れて学校へ駆けつけると、アメル（ Hamel）先生が教壇から、今日はフランス語の最後の授業だ、フランス語は世界で一番美しいことばだと大演説をぶって、最後に「フランス、アルザス」万歳と黒板に大書して、涙ながらに教室を去っていくというお話です。アメル先生の大演説の中に「ある民族がどれいとなっても、その国語を保っているかぎりは、そのろう獄のかぎを握っているようなものだから、、、」（岩波文庫桜田佐訳）という台詞があります。これはドーデの先輩フレデリック・ミストラル（1830-1914）の「それ（民族）はその言語を握っているなら、自分を鎖から解き放つ鍵を握っているのだ」の間違った受け売りです。

ところでフランツ君やアメル先生の母語は何だったでしょうか。フランツ君はゲルマン系アレマン語の方言アルザス語でしょう。またアメル先生も名からして多分同じでしょう。だとすると、彼らが握っているはずの言語はフランス語ではなくて、このゲルマン系のアルザス語です。だとするとこのお話は完全にひっくり返って茶番になってしまいます。ドーデの意図はこの社会状況を隠蔽して遠く離れたパリの大衆のために戦意高揚のためのお話を作り上げることにありました。しかしよく見ると、フランスの戦時ナショナリズムがこの地方の言語（かれらはパトワ（＝訛）と呼ぶ）を圧殺する有様を見事に書いていることが分かります。

さてこのフランツ君のことばアルザス語はまだ生きています。ストラスブール（＝シュト ラスブルグ）にルネ・シッケレ（René Schickele）協会という地域団体があって、土地の言語であるアルザス語の保存と普及のために働いています。この協会の作ったポスターをはがき風にしたものがありますので、それを見てみましょう。



少年（左）：フランス語で「こうのとりはどうしてここに降りてこないで飛んでい っちゃうの？」
おじいさん（右）：アルザス語で「坊や、もうついたかなと思って降りようとしても、まだフランス語ばっかりでアルザス語が聞こえてこないから、まだつかないと思っちゃう んだよ。」
少年の後ろにフランス語で：「アルザス を落ち込ませるな！」
おじいさんの後ろにドイツ語で：「二言語使用－われらが未来－」
下に大きくアルザス語で：「子供達にアルザス語を教えよう！」
ルネ・シッケレ協会 ストラスブール CCP 958-81 D, Oberlin街 31

ここからはっきりと分かることがあります。それは、多言語状況に対する障碍はナショナリズムの国語政策であるということです。逆に言うと、国家主義的国語礼賛が人間集団にもともと備わっている多言語共生にたいする正面の敵であるとも言えるでしょう。

参考：田中克彦『ことばと国家』岩波新書 , 1981
金子 亨「アルザス語の現在」（初出『ドイツ語学研究１』クロノス, 1985／『先住民族言語のために』草風館, 1999 所収）

言語学ゼミナール（16）Multilingualism ②
扼殺された善意１：ソ連初期民族政策 －『ソビエト的北方』1930-1935 について

2010年4月3日（土）12時30分－13時30分
慶應義塾大学三田キャンパス第1校舎110教室

多言語社会への夢が強大な国家権力の力で扼殺 された例があります。ナショナリズムが多言語社会にとって政治的にも精神的にも一番こわい障碍であることは前回もみましたが、 20世紀の壮大で悲劇的な実験であったソ連型社会主義では巨大な政治権力がその創生期に善意の青年達の多言語社会への夢を根底から破壊しました。

ロシア革命後のごく短い時期に、ロシア共産党（後のソ連共産党）の中央委員会幹部会常任委員会に附属して北方少数民族協力委員会（略称：北方委員会）が置かれたことがありました。この委員会は 1924年6月に構成され、1935年の夏に解体されたのですが、その主な任務は、第一に北方地域におけるすべての国家機関に指令を与えること、第二に、地方の労働組合に統一的な指示を与えること、そして第三に、「北方諸民族の慣習とその状況に関して正確な情報を得て広範な出版活動を行うこと」とされていました。とりわけ「原住民ソビエトなど原住民組織の指導性を高めること」がその主な活動方針となっていたことに注目したいと思います。この委員会の第 1回全国大会は1924年10月に開催されて、当面の活動方針が決められましたが、その第一は、原住民幹部の養成であり、そのための機関はレニングラード（現サンクト・ペテルブルク）国立大学の労働学部（後の北方学部）であるとされました。この委員会の具体的成果として、後の統計では1925/26年から1929/30年に全北方地域で原住民学校が 6校から

123校に増加したと報告されています。その教師や医療指導者を含めた原住民幹部は、 1929/30年には北方学部卒業生だけで325人に上ったともいいます。

北方委員会は機関誌『ソビエト的北方』を刊行しました。しかし革命に伴う内戦と干渉戦争のためにそれが刊行されたのは1930年からでした。原則として 2ヶ月刊とされていましたが、決して定期 的に刊行されたのではありませんでした。しかしその記事はどれも刮目すべき内容で、例えば、原住民はそもそも何語で教育されるべきなのか、原住民語はラテン文字で表記されるべきで、そのうちにロシア語そのものも国際化されてラテン表記に変わることだから原住民語ははじめからラテン語にしておくべきだなどの意見が公的に論じられました。

しかしこの自由で理想主義的な論議も長くは続きませんでした。 1926年にはソ連初期の民族政策に決定的な影響を与えたレーニンが死亡します。その翌年には彼の盟友であったトロッツキーが亡命を余儀なくされます。それとともにスターリンの個人崇拝と支配権が一気に高まりました。象徴的な事態は、クラークとよばれる農村富裕層の問題にも見られます。北方学部の自由討論では「クラークをどうするか」というアンケートにたいして「自分の労働で生きている限りは生存権を奪われるべきではない」という意見が公表されたのですが、スターリンの政策では1928年にはこの階級は全面的に撲滅されるべきであるということになっていました。事実、アムール下流のニヴフの村でもクラークと名指されたものがこの年に処刑されました。 1930年を越えると北方学部の指導者ボゴラス＝タン教授のチュクチ語教科書にも言いがかりがつけられるようになります。そして1934年に起きたキーロフ暗殺事件が一気に流れを変えます。1935年末に刊行された『ソビエト的北方』3/4合併号は北方委員会主任スミトビッチの追悼号でしたが、同時にこの雑誌の廃刊の通告でもありました。『ソビエト的北方』は次号から『ソビエトの北極』と改名されるというものでした。しかしこの新しい雑誌『ソビエトの北極』は、原住民とその地域における新しい生活の建設、医療や教育の向上のための政策とは全く無縁で、この雑誌の任務は北極海開発に関する技術・政策にありました。こうして北方委員会も実質的に解体され、その機関誌『ソビエト的北方』は第 6号で生命を終えたのでした。この間のもう少し詳しい経緯は配布した資料「『 ソビエト的北方』と『タイガとツンドラ』のことなど」（ナウカの『窓』雨宮潔編, 通巻111号, 1999-12刊）にあります。この雑誌も廃刊になりましたので、金子のHPを参照ください。

次回はここで話が出来なかったもう一冊の雑誌『タイガとツンドラ』について報告します。

言語学ゼミナール（17）Multilingualism ③
扼殺された善意 2：ソ連初期民族政策 －『タイガとツンドラ』について

2010 年 5 月 15 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス第 1 校舎 108 教室

ソ連（1917-1991）の初期、1930 年代前半まで、その地域内部の少数民族が大きく高揚した時期があった。この時期のソ連共産党はレーニンの民族政策を実現しようとして、各地の少数民族のエリートをレニングラード（旧・現サンクト・ペテルブルグ）に集めて、熱心に教育しようとした。その目的はそれぞれの地域における「ソビエト的」秩序の建設にあったが、第一課題は文盲の一掃、医療・教育を含む生活的必要事の建設であった。集められたエリート自身が文字を学ぶことが急務であった。

この役目を担ったのがレニングラード大学のボゴラス・タン教授（1865-1936、チュクチ語研究の第一人者）だった。彼は北方委員会の決議に基づいて 1924 年末にレニングラード国立大学現存言語研究所に労働学部（ Labfak と愛称）を創設して、寝食を共にして地域から集まった少数民族のエリートたちを教育した。

このボゴラス・タンが、北方少数民族の師弟の養育の様子について、見事な報告を書いている。以下それを雑誌『北方アジア Severnaya Azia』1927 年第 2 号から一部引用する：

「この学部は 1926 年 10 月 11 日に授業を開始したが、10 月の 1 日には各地からボロをまとった学生たちがレニングラードに着いた。ギリヤークのモグチは一家四人でやってきた。上の子供は四歳だった。学生の知識はばらばらで、多くは全くの文盲であって、大部分の学生は猟師の掘建て小屋やツンドラのユル タから直接出てきたばかりなので、都会生活は全くダメで、ロシア語を分かるものもほとんどいなかった...

中にはヤクートからやってきた年かさの青年のように、算数はできる代数も分かるというわけで、すぐに大学の一般の学生となじみになる者もいた。アレウト人ハバロフは最年長で、バルチック艦隊に勤務したこともあって、日本にもいったことがあるという。最少年者はなんと六歳であった ...

チュクチ人テブリャントは孤児であった。猟師の家に生まれたが、父親は女を見つけて出奔。母と喧嘩して、アナドウル河畔に住むお祖父さんの元に走るが、お祖父さんはシャーマン、まもなく近所の者たちによって殺害され、独りぼっちになる。利発な子供だったので、地域ソビエトが労働学部に推薦して、いくつかの問題はあったが、幸運にも合格。しかしロシア語が全くできないので、レニングラードまで行くのは到底無理と判断された。再び幸運にもハバロフスクからロシア語の分かるユカギール人学生パルファンチェフ君が同行したので、痩せこけておんぼろの姿だったが、何とかレニングラードはモスクワ駅に到着した ...

ある時、黒板に k o s h k a と書いて、彼にその意味を尋ねた。しかし分からない。そこへネコが一匹。教室にネコがいたのだ。＜あれだよ。あれはチュクチ語でなんて言うの？＞　＜あれ？リス・キツネかな？＞

それから数ヶ月後「タイガとツンドラ」と称する壁新聞が出はじめた。その文章のいくつかは原住民語で書かれていた。ツングースの一人はそれをラテン文字で書いた。アレウトのハバロフにとっても初めての文字であった。いまだかって誰一人としてアレウト語で文章や詩を書いたアレウト人はいなかった ...

絵描きもいた。ゴリドの娘オニンカが壁新聞にアムールの岸で働く漁師を描いた ...

またいつだったか、人類史の授業をしたときのことである。教室は奇妙な雰囲気につつまれた。誰かがいった。＜北方は一万年遅れてい るぞ。俺たちはその遅 れを一年で取り返すぞ。＞ その意気込みと熱気はすごいものだった。」

Labfak の学生たちは自主的に雑誌を公刊した。『タイガとツンドラ』である。この雑誌は 1928 年に創刊。発行者（第一巻）：全ロシア共産党中央委員会幹部会付北方委員会レニングラード支部発行、エニキゼ記念レニングラード東方大学北方学部北方サークル刊、編集主幹：ボゴラス、副編集長：コーシキン、編集局員：モル、ハバロフ君他二名、発行部数：1000 部であった。

この雑誌の歴史について、次のように書かれている。

「10 月革命のおかげで、北方は完全な自由と保護権を受け取った。そしてここでは 1925/26 学年度にレニングラード国立大学労働学部北方科が結成された。ここで北方諸民族の学生 26 人が学んだ。」...この年の末「コーシキンの指導のもとで東方大学北方学部に北方サークルが結成された。」「 1926/27 学年度には北方サークルが現存言語研究所北方部労働学部に編入され、ジェツコエ・セロ（現プーシキン市夏宮殿）に移った。学生数は 70 人であった。」...「1927/28 学年度には学生数は 130 人に増え、ツングース・マンヂュウ班、古アジア班、フィン・ウゴル・サモディ班の三班が作られた。」（エヴェンキの学生ヂオードロフ）

『タイガとツンドラ』第 2 号（1929）の記事から：

学校教育関係：「ロパール（サーミ）からは、1929 年に学校が開かれ、生徒は男子 10 人，女子 29 人、この地域でこれまで完全に文盲であった者 は男子 8 人であったこと、さらに昨今子供たちがロシア語を習いはじめたことが報告されている。オスチャークからの報告では、1924 年にインテルナートが開かれた。しかし最初は生徒集めに苦労したが、今では 40 人の生徒がいる。教育はロシア語でロシア語の 教材を使っている。「しかしラテン式のアルファベートが導入されてそれで原住民語が教育されるようになっても事態は変わらないだろう。」なによりも生きた教材を使って漁・猟を教えること、その中で共産主義の心を教育することが肝心だという。またネネツ地区からは、ツンドラで学校を作るのは大変だ。しかし、やっとステップにもいくつかの学校ができた。学齢期の子供がよい働き手であるという事情が実はむづかしいところで、生活の場から学校までの運搬手段をどうするかも問題だ。しかし「活動の成否は人々の言語知識にかかっている」ので、なによりもまず文化教育活動を強化しなければならない。」

既に、インテルナート制度の導入がソビエト建設の軸であったことが示されている。

『タイガとツンドラ』第 3 号（1931）：

このころ、ボゴラスの指導による労働学部、北方学部ではすでにラテン式書記法が出来あがっていて、当然のことのように日常的に使われていた。『タイガとツンドラ』年報 3 号（1931）の冒頭には「万国の労働者よ団結せよ」が 15 言語でラテン文字表記されている。

言語名を付けないままで掲げてみよう。

1. Hawamnil upkattuk dunnelduk umunupcekllu!
2. Agunas tannam usudin illagnin terin atakasehtyri!
3. Sehke madest robetnexk lated!
4. Zoqboi sinadu davuse jacududi!
5. Cebetsen weldenlleen gustige ingusin!
6. Koside hemu teresi be havben!
7. Kovhsall-heit kamah luni nunnalkavnoh sema!
8. Zoboyisel eme derae buga dukkou amahun!
9. Tit iox mulovat elttax tysat!
10. Sovonimi xibiri mallids!
11. Embgenutekin ocin remkin numekerkin!
12. Witatsin varat uptpo nnanno gamallin!
13. Colanigevn sik kurmuh vopure!
14. Vetatkkalar vseh ksen utmellos!
15. Hellil aydutuvduk repkaptilv!

『タイガとツンドラ』1933 年号 No.3：

この号は 1933 年 10 月に刊行予定だった。しかしついに発行されなかった。

その後 1935 年には北方委員会そのものが解散させられ、ボゴラス教授は 1936 年に亡くなった。次いで 1937～1938 年の「大粛清」が始まった。 次いで第二次世界大戦が始まる。

そしてあの北方学部に集まった学生たち、それを卒業して地域で活動した学生たちは誰一人としてこの時代を生き延びなかった。

（金子　亨）

言語学ゼミナール（18）母語について

2010 年 6 月 12 日（土）12 時 30 分－13 時 30 分

慶應義塾大学三田キャンパス第 1 校舎 105 教室

※この回はゼミのために準備された レジュメ（事前資料）を掲載しました。

１．「母語論」

１．１．『母語の言語学』レオ・ヴァイスゲルバー，福田幸夫訳，三元社，1994

Das Menschheitsgesetz der Sprache. Leo Weisgerber 2. Aufl. Q&M Heidelberg 1964

(l. Auf. Das Gesetz der Sprache, vorwort 1950)

基本的主張：母語的世界像の形成とその思考決定性

(1) 世界の母語的加工

(2) 母語要素による世界（「中間世界」）構築

(3) 母語集団（＝「民族 Volk」）固有の世界像の形成

いくつかの含意：

(4) 母語の認識決定性　→　非母語的思考の不可能性

(5) 言語多様性の評価　→　言語間の相互認識不可能性

(6)「言語相対論」のもっとも極端な事例

→　池上嘉彦の論文、特に、『言語・思考・現実』ベンジャミン・リー・ウォーフ, 弘文堂, 1978（のち講談社学術文庫）

１．２．『日本語』金田一春彦，岩波新書，初版 1958，上下二巻増補判 1988～

いわく：

さまざまな外国語と比べて、日本語は一体どんな特徴をもっているのだろうか。発音・語彙・表記法・文法など、あらゆる角度から光をあて、日本語の面白さ、すばらしさ、そして欠点を具体的に解明する。ロングセラーの旧版をもとに、刊行後三〇年の日本語の変容に即して全面的に手を加えるとともに、言語学の最新の成果を盛りこんだ決定版。（E-hon 書評要旨）

実態は、常識を越えない一般論を言語学的理論の整合性を無視して書き記した感想文であり、「日本語っていいですねぇ」という笑顔を活字にしたもの。

１．３.『祖国とは国語』藤原正彦，2006，新潮文庫など

思い込みと事実誤認にもとづく感想文であるが、国語＝母語のすり替えによって国語による国家主義＝愛国主義を鼓吹した。「国語主義者」に典型的な大言壮語。

なお、彼のこの「論理」は、教科としての「国語」、国家語としての「国語」、母語がたまたま国家語と一致した場合の「母語＝国語」とを（多分）意図的に 混同したところから成り立った虚言である。

参考：上田万年の思想（Kaneko Tohru HP、安田敏朗『帝国日本の言語編成』セオリ書房 , 1997）

２.「母語話者」

２．１．ある定義

A Typology of Native Speaker by Th. Ballmer, in *Festschrift for Native Speaker*, ed. by F. Coulmas, Mouton, 1990, pp.51-91

"**Def 3**: **A native speaker** of a creative (spoken) language L is a human being *able to produce* adequately expressions of L in communication, who is normally socialized and who *acquired* this ability in the process of primary socialization.

A native speaker is old enough to know the language and not so old as to have forgotten it. He is healthy in every relevant respect, thus especially neither blind, deaf, handicapped, paralyzed, nor does he lisp, stutter or have a cleft palate. He is monolingual, he lives in his birthplace, his family, especially his mother, speaks (natively) his nature language L, the place where he lives is strictly monolingual: there is no standard speech/dialect split and there are no other competing language."

２．２．問題点

① (his) "primary socialization"

② "normally socialized"

③ "enough to know the language" → to judge a sentence as well-formed

i.e. by the Grammar of L produced

④ "old enough" and "not so old as …"

⑤ the health items

⑥ strict monolinguality of his birth place

⑦ → no other competing language/dialect?

２．３．含意

1) a native speaker は理想型

→ 完成度の段階

→ 条件の到達度の諸段階

2) 評価 well-formedness の段階

従って、

3)「母語」（＝native speaker の product）の段階制

（ambiguity や relativity ではない。「理想型」に対する完成度の問題。）

Intermezzo:

「自分自身を変えるこころと脳」滝沢龍・笠井清登・福田正人 （『こころの科学 150 号（特別企画：こころと脳の科学）』2010.03, pp.100-106）：

「（２）言語の役割とその発達 「言語にはいくつかの役割がある。一つには「コミュニケーションの手段」であり、二つ目には「容量無限の外部記憶装置」としての役割 を果たし、三つ目には「思考の道具」ともなる。（以下略）」」（下線 kaneko）

注意：

① 言語記号は音声のタグをつけているので、「外部記憶装置」は音声の集合

② 特定言語の形態は音声タグを付けた意味

③ 文法はどういう形で記憶されるのか？